
わたしの世界が変わる時

長沼たまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしの世界が変わる時

【Nコード】

N3241J

【作者名】

長沼たまき

【あらすじ】

黒魔法国家パールミレイ国第5皇女のルシフェルは、12歳という若さで黒魔法軍の総帥として君臨する、世界最高峰の黒魔法使いであった。ルシフェルのおかげで、パールミレイ国は世界最高の軍事国家となり、大陸のたくさんの国を支配していた。しかし、不倶戴天の敵がいた。それが隣の国、科学国家フィラ国である。

王国歴2045年、フィラ国皇女エリスは、ルシフェルと同等の力を持つ魔法使いアッシュと出会い、強引に助っ人として国に迎え入れる。そして、再び両国の間で戦争が始まった。

その戦争の最中、ルシフェルは、戦場で、逃げ遅れた一人の少年シエンと出会う。大人社会の中、感情を殺しながら育ったルシフェルは、シエンの見せるさまざまな表情に心を開き、二人はすぐに友達となった。

そこから運命ははじまり、そしてねじれていく。

プロローグ（前書き）

昔、すごい長編マンガを考えていて、そのサイドストーリー的に考えたものが先に完結して残っていたので、投稿します。楽しく読んでいただければ幸いです。さらに、よかったら感想をいただけるとうれしいです。

それでは、ファンタジーの世界へ……………

プロローグ

プロローグ

世界の中央に位置する大陸に、大きな国が二つあった。

世界一の黒魔法国家パールミレイ国、そして世界一の科学国家フィラ国であった。

両極端な分野で突出した二つの大国は、たがいにいがみ合っていた。パールミレイ国は、その強大な黒魔法の力で、この大陸のたくさんの国を制圧し、服従させていた。しかし、科学国家であるフィラ国とは相性が悪く、和平協定を結んでも、何かと理由をつけ、長くて数年、短くて数ヶ月で協定は破られ、戦争になっていた。

王国暦二〇四五年。この時、パールミレイ国はフィラ国と再び戦争を始めることになる。

この物語は、その戦争の最中、黒魔法国家パールミレイ第五皇女ルシフェルパールミレイを中心に繰り広げられる。

少し、ルシフェルの身の上を紹介しよう。ルシフェルは、他の四人の皇女と母親が違ったが、姉妹の中で一番国王の寵愛を受けていた。理由は、その魔力にある。世界最大の黒魔法国家の、悪名高い黒魔法使いの国王と、高貴な血を受け継いだ、白魔法使いの母親との間に生を受けたルシフェルは、いわば、サラブレッドであった。

国王は、ルシフェルに自分の持てる全ての知識を与え、自分の考えを徹底して教え込んだ。他の四人の皇女の母親である国王の先妻は、十八年前、病気で亡くなった。ルシフェルの母親は、当時、国王付きの侍女であった。身分の違いから結婚できず、ルシフェルを産んですぐに、戦争で命を落とした。ルシフェルを自由にできるのは、父親である国王だけで、自分の築き上げた帝王学を教え込むのに、都合がよかったのだ。

国一番の黒魔法使いの實力と、徹底した帝王学を教え込まれたルシフェルは、若干十歳にして、パールミレイ国黒魔法軍の総帥の座に登りつめていた。

頂点に立つ者として、感情を表に出さぬ事を教え込まれたルシフェルは、父親譲りの栗色の髪と、母親譲りの緑の澄んだ瞳を持ち、美しく成長したにもかかわらず、表情を変えることは少なかった。

不幸なことに、ルシフェルが最も助けを必要としていた時期、第三皇女の結婚、そして第四皇女の魔法学校での寮生活が始まり、城の中のルシフェルは一人になる。国王の後継者として、パールミレイ城にいた第一皇女も、元老院としての職務が忙しく、また、ルシフェルも軍の施設に籠りきりで、顔をあわせることは皆無であった。そうして心を閉ざし、感情を失くしていったのだ。

そんなルシフェルに、人生の転機が訪れる。それは、誰にでも訪れる出会いと別れ、挫折と失望……そして希望であった。

第1章 始まり【1】

事の発端は、フィラ国から始まる。

『機械仕掛けの要塞』それがフィラ城の呼び名であった。科学国家の名に恥じぬ程の、様々な仕掛けがこの城にはあった。簡単に侵入できないように、ありとあらゆる廊下に仕掛けが施してあり、至る場所に抜け道があった。迎撃の為の大砲や機関銃も色々な窓に設置されており、呼び名の通り鉄の要塞であった。

城と隣接し、国家の中枢であり要でもある先鋭の科学者達の研究施設があった。ここでは、暮らしに役に立つ機械から、戦争に使う武器まで開発が進められていた。ここの研究に使われる費用は、国家予算の大部分を占めている。

フィラ国第一皇女エリスの自室は、日当たりがいい南側の塔にあった。春の柔らかい日差しを浴びながら、エリスはベランダに椅子を置き、侍女達が持ってきた紅茶とお菓子を食べつつ、退屈そうに空を眺めていた。エリスは、今年で十八歳になる。すでに結婚していてもおかしくないのだが、未だに良縁に恵まれない。その理由は、読み進めればわかるだろう。

雲ひとつない真つ青な空、その空と同じ色の小鳥が二羽、優雅にエリスの目の前を飛ばたいている。じゃれあうように飛んでいるその小鳥達は、なかなかエリスの視界から消えなかった。それを眺めているうちに、エリスはだんだんイライラしてきた。短気なのである。

「ランス！ランスロット！！」

「はっはい！何でしょう姫様」

ランスロットと呼ばれた男は、室内からエリスの側まで走り寄ってきた。歳は二十歳。まだ若さが残ったあどけない顔をしている

「暇だから、何かおもしろいことしてちょーだい」

ダルそうに言うと、エリスは欠伸をした。

「え……えええ！？またですかああ？」

「文句あるわけ？」

エリスは、ランスを睨み付けると「早くしてよ」と言い放った。

「俺、こう見えても軍に入ってるんですよ？ これじゃあ全然訓練できないじゃないですか！」

ランスは、身に纏った軍服をひっぱりながら、泣きそうな顔をしてエリスの前に立つ。

「あんたねえ、私の側で働けるのよ？ 名誉なことじゃない」

「姫様は、幼馴染の俺をいのように使いたいだけなんですよ」

ランスは、フィラ国大臣の嫡子であった。年が近いせいでエリスとは幼馴染で、幼い頃から彼女の小間使いにされていた。そのせいで下僕体質が染み付き、我がままなエリスの相手ができるのは、唯一、ランスだけだった。国王でさえ、エリスには手を焼いている程の傍若無人っぷりであったが、我が子かわいさ故、国王はそんなエリスに好き放題させていたのである。

将来は、国の為に尽くそうと軍隊に入ったランスだったが、エリスの我がまままで、度々呼び出されては、軍隊の訓練より過酷な毎日を送っている。軍人というより、エリス付きの侍女のといったところだ。本来、学者肌のランスは、軍隊は向かないのだが……、どちらがランスロットにとって過ごしやすいのかは、本人でもわからないところだ。

「いいじゃない別にさあ、幼馴染のよしみで、ね」

悪魔だ。

ランスは、このエリスの笑顔が幼少の頃からずっと恐怖であった。この笑顔は逆らったら怖い、とインプットされているのだ。条件反射とは怖いもので、ランスは、この笑顔が出ると体が萎縮してしまう。

どうしたものか、とランスが困り果て立ちすくんでいると、エリスは、思い立ったように急に椅子から立ち上がった。

「ランス、街へ行くわよ」

「え？」

「お昼ご飯の前に、少し運動をしましょう」

エリスは、呆気にとられているランスの脇を颯爽と通り過ぎると、衣装部屋へと続く扉を開いた。

色とりどりのドレスが、所狭しと飾られている。我がままなエリスは、部屋着だけでも山のように所有していた。どれも、一度着たものはめったに袖を通さない。そのくせ、同じようなデザインのレストランを持っているのである。今着ているマーメイドドレスのデザインが、一番多い形であった。今日のドレスは淡いピンクの色目で、肩ひもの部分が、ライNSTーンで仕立ててある。これが真珠であつたり、ホルダーネックであつたり、今日のようにライNSTーンでも、微妙に石の大きさや形が違つたり……色々なのだ。

「あ、これ着てきてね」と、エリスは、部屋の奥にある小さな箱の中から取り出した服を、ランスに放り投げる。「女装してくのよ」「はあ!？」

ランスは、手に持った服を広げた。見ると、下町の少女が着ているようなエプロンドレスで、色は黄色だった。

「ほら、そのまま行つてもおもしろくないじゃない。だから、ランスには女装してもらうの」

優しくにつこりと微笑んだエリスの顔が、ランスには悪魔の微笑みに見えた。

おもしろくなくていいよ……。

ランスは、エプロンドレスを眺めながら肩を落とした。

「そのエプロンドレス着て、化粧だって私がしてあげるし、あんた髪長いから大丈夫よ」

エリスは、ブーツやショールをランスに投げつける。

「下町の子の服を、侍女から手にいれてあつたのよ」

「……いつのまに……っていうか、こんなスカートはいたら、万が一って時に姫様をお守りできないじゃないですか」

「そんな時は、あんたを盾に逃げるに決まつてるじゃない」先ほどよ

りも、さらに優しくエリスは微笑みながら言った。

やっぱり悪魔だ……。

ランスは、これから起こりうるであろう危機を、できるだけ最悪な方向へとシフトさせ、想像したのであった。

城が城なら、城下町も機械で埋め尽くされていた。電光掲示板が様々な画像を映し出し、お店の宣伝や、世界で起きているニュースなど、人の目をひくように次々と流れている。この街は、夜になっても光を失わない。昼間よりも明るいのではないかと、錯覚するほど、ネオンであふれかえる。そんな街であった。

魔力をあまりもって生まれなかった人間が「自分も魔法を使いたい」と強く願った。そんな夢をもった科学者達が作った国……、それがフィラ国だった。科学者達は、日々努力し、魔法が使えなくても、火をおこし、風をおこし、大地を動かすことができる、そんな夢のような《機械》を発明したのであった。

だが、決して魔法が使えない人間ばかりが集まっているわけではない。魔法が使えるが、フィラ国に生を受けた者もいる。また、世界中で、機械を使っている国がフィラ国だけというわけでもない。黒魔法国家パールミレイ国も、機械は使っている。ただ、フィラ国は科学を、パールミレイ国は黒魔法を最強と考えている故に、その部分が突出しているのであった。

しかし、大きすぎる力というのは、身を滅ぼす。フィラ国は、銃が一般市民でも手に入りやすい国であった。残念ながら、治安は良い方ではない。

エリスとランスは、そんな城下町の喧騒の中を歩いていた。

先ほどから、アクセサリショップやブティックに入っては、あれがほしい、これがほしい、とエリスは我がままを言いたい放題で、ランスを困らせていた。こんな服装でなければ、便利な荷物持ちになつたランスだったが、こんな服装である。持って帰れるだけの荷物にするには、全部買うことができなかった。それでも、ランスは

両脇に荷物を抱えている。

「こんなに金回りがいいと、目をつけられちやますよ……？」

エリスの耳元で、ランスは静かに言う。

ランスの身長は、一六八センチ。エリスから渡された、黄色のエプロンドレスと、ヒールがあまりないブーツを履いていた。普段は束ねているダークグレイの肩までの髪を、綺麗に巻いて上品にカールさせていた。元々女性的な顔立ちをしているランスは、化粧をすれば女性と紹介されても疑う余地はなかった。

一方エリスは、青いエプロンドレスに、顔が見えないようにショールを頭に巻いていた。上手にカールされた金色の髪は、そのショールから胸へと流れていた。余計なアクセサリはつけないようにしていたが、道中買った高価な指輪が一つ右手にはめられていた。エリスの身長は低く、一五三センチだった。ヒールの高いブーツをはいても、ランスとの身長差は、一〇センチほどであった。

城下町の人間の目には、この二人をどう映っているのだろう。妙な二人組みだと好奇の目で見ていたのか、フィラ国皇女エリスであると気がついていったのか……、服装こそ下町の娘だが、何しろ買い物する量や値段が半端じゃない。あきらかにこの二人は、周りから浮いていた。ジロジロと見てくる輩ばかりである。

ランスは、周りを見渡す。作業着姿の女の子が、口をポカーンとあけてスパナ片手に自分たちのことを、眺めているのが見えた。買い物途中のおばさんとも、一瞬目があつたが、そらされてしまった。自分が男だとバレて、みんなに見られているのではないか、と錯覚し、ランスは冷や汗が出てきた。

「黙ってついてきなさい。いざという時の為に、コレもあるんだから」

エリスは、右手を顔の高さまで持ち上げながら、ランスを睨み付けて言い放つ。

ランスは、短い溜息をはくと、諦めてエリスについていった。

二人は、銃を持っていた。腕についているブレスレット型の小型

銃は、護身用に城の科学者達が開発したもので、まだ市場に出回っていないかった。これを銃だとわかる人間は、二人の他、ここには皆無であった。ランスは、さらに、スカートで見えない左右の腿の部分に、ナイフと銃をつけていた。だが、この大荷物では、咄嗟に取り出すことは不可能だろう。小型銃の方も、荷物が重くて腕をすぐにあげられない。彼は、少し不安であった。

ランスは両腕に荷物をかかえ、これ以上物が持てない状態だったが、エリスはまだ買い物する気満々らしい。キョロキョロとあたりを見渡し、欲しいものを物色している。

シヨウウインドウ越しに服を見ているエリスを眺めながら、ランスはガラスに写った後方に目を向ける。自分達を見ている二人組みの男の顔を見て、確信する。先ほど、エリスが立ち寄った店の外にもいた二人だ。二人は、慎重に距離を保ちながらランス達を追いかけていたのだ。

ランスは、歩き出したエリスに耳打ちをする。

「ほら、姫様が我がままするから……、つけられてるじゃないですか！」

「ふーん、そう。どこ？」

「後ろ見ないでください。我々が気づいたのがバレます！」ランスは、振り向こうとしたエリスの体を肩で制し、小声で窘める。

「いいですか？ 斜め後ろ……、街灯の下に立っている茶色の帽子をかぶった細面の長身の男と、その脇にいる作業着を着た小柄な男です」

エリスはシヨウウインドウを眺めるフリをし、後ろを向かないようにその二人組みを素早く目だけで探す。ランスの言ったとおり、斜め左後ろの街灯の下にこちらを伺うようにして立っている。

試しに通り一つ分歩いてみると、その二人組み何気ないフリをしながらエリス達の後を追ってきた。

「本当みたいね」

エリスは、不機嫌そうに言うと、ブレスレットの一部を回した。

カチリと音がして、隠れていた銃口があらわになった。ランスはエリスのその行動にギクリとして、目を丸くした。

「何するつもりですか！こんな街中で銃ぶつ放す気じゃないでしょうね！？」

ランスは、エリスを自分の肩で軽くはじく。

「悪い奴撃つて、何が悪いのよ！」

「市民を巻き込むつもりですか！？」

「子悪党を排除するのも、王族の役目よ」エリスは口の端を軽く上げながら言つ。

そして、言うが早いか、エリスは後ろを向いて、ブレスレット型小型銃で目標を捕らえる。と同時に、引き金となるボタンを押した。
「ダメ　　ッ！！！！」

エリスが撃つのと、ランスの声どちらが早かっただろうか。ランスの声に反応して、周りにいた人がこちらを向く。ランスは、持っていた荷物が落ちるのもかまわずエリスの腕を押さえようと飛びかかっていた。

ランスの動きが、エリスよりもほんの数秒早かった。

エリスの腕は下を向き、銃口は道路に向けられた。しかし、運悪く弾丸は排水溝の蓋に当たって兆弾した。

脳から出る分泌物のせいだろうか……。ランスは、周囲の出来事がやけにスローモーションに見えた。同時に、耳からは音も消えていた。

兆弾した弾丸は、ランス達の右後ろ、つまり、二人組みとは反対側の街灯の下を歩いていた通行人に当たろうとしていた。手押し車を押した老婆だった。

ゆっくりと流れる時間の中、ランスロッドは成す術もなく、弾丸の行方を息を呑んで見守ることしかできなかった。

まさに、一瞬の出来事であった。

老婆の前に、男が現れたのだ。

故意に飛び出したのか、偶然歩みをこちらに向けたのか……。

なんと、弾丸は男の手前、数センチで速度を失って空中に止まったのである。

その場にいた全員の視線は、弾丸と、それを止めた男に注がれていた。最早、撃ったエリスはどうでもいよいよだった。

よく見ると、弾丸は止まったというより、見えない壁にのめりこんでいるように見えた。今もなお、回転を続け、ゆっくりとその壁を押しつけている。空間が一瞬歪んで見えた。老婆の前に躍り出た男は、ゆっくりと顔をこちらに向けながら、弾丸に手を伸ばした。

男が掌を弾丸に向けると、そこから風が巻き起こったかのように渦が生じ、弾は勢いを失った。弾丸の回転と逆向きの回転の風が、弾丸の回転を止めたのだらう。仕舞いに、男は弾丸を人差し指と親指で軽く掴み、ジツとそれを眺め始めた。

と、同時にワツと歓声があがる。一連の出来事を眺めていた人々の時間が、動き出したかのように音が戻った。拍手と歓声が上がると、老婆は、自分に近づいていた危機に気がついていない様子で、不思議そうに観衆を眺めながら、手押し車を押し、歩いていった。ランスの時間のスピードも元に戻り、耳に音が戻った。そして、足元に散乱したエリスの荷物に気づき、肩を落とした。壊れるような物は買っていない。だが、荷物を落としたとなると、エリスからどんなお仕置きが待っているか、想像しただけで顔が青くなった。たった今起きた事柄よりも、この瞬間の顔の方が青ざめているだらう。

ランスは、足元に落ちた荷物を丁寧に拾いながら、弾丸を止めた男を眺めていた。

「あんた……、何のつもりだ」

男が、エリスに向かって摘んだ弾丸を差し出し、近づいてきた。近くで見ると、男は背が高かった。一八〇センチはありそうである。目を覆い隠すように巻かれたバンダナで表情は見えなかったが、少し怒ったようにエリスを見下ろしている。

「お前、何者だ」

エリスは、一步後ずさりながら言う。堂々としているつもりだろうが、顔には恐怖の色が濃く出ている。言い放った声も、体も軽く震えていた。

「お前……」

「あ、あの、ここではちょっと申し上げにくいので、こちらへ……」
男が苛立ったような声で言いかけたので、ランスはそれを制し、歩き出した。エリスは黙ってそれについていく。

発砲が日常茶飯事なのか、人々は気にも留めず、すでに各々の生活を始めていた。これが、フィラ国の治安なのだ。ランスは、この現実顔に顔をしかめながら足早に歩いていった。

少し人目につきにくい裏路地に入ると、ランスはそこで振り返る。すぐ後ろにはエリス、少し離れてその男も立っていた。

「ありがとうございます！！」

ランスは、男に向かって深々とお辞儀をした。エリスは、ランスの突然の行動にあっけにとられ、目を丸くしたまま動かなくなった。「私達は、二人組の男に狙われていたんです。彼女は、その二人組を脅そうと銃を向け、誤って発砲してしまっただけです！ あなたが助けてくださらなければ、我々は罪のない老人の命を奪ってしまうところでした！ 本当にありがとうございます！」

ランスの言葉に、エリスが途中つっこみたそうに口を開いたが、有無を言わずに一気にしゃべり終えた。エリスが話すと、とんでもない結末になりそうだったからだ。支離滅裂な事を言い、自体を悪化させるハメになるという自信が彼にはあった。考えた結果「エリスには発砲する気はなく、誤って引き金を引いてしまった」ということにしたのである。

ランスは、男の表情を伺おうとしたが、バンダナのせいで全くわからなかった。機嫌が悪そうな雰囲気だったが、背の高さによる重圧感のせいでそう思うのだろうか。ランスはその男が何か言うのを待ちながら、観察することにした。

男の背は、一八〇センチほど。肌は浅黒く、南方出身者を思わせる。緩いクセのある髪の毛は、燃えるような赤で、伸びかけたショートカットほどの長さであった。肌の露出のない服装ではあったが、ガツチリとした肩幅から痩せても太ってもいない、理想的な筋肉のつき方をしているのではないかと予想できる。目は見えないが、見えている部分……、つまり鼻と口は非常に整っており、余計にその男の美貌が伺えた。その口から溜め息が漏れる。

「これ、あんたたちのじゃないのかい？」

急に他者の声がして、驚いた三人が同時に振り向くと、エリス達を尾行していた二人がそこに立っていた。手には、エリスが買ったと思われる指輪を持っていた。

「あつ……」

エリスは、右手に目を落としてハツとした。買ったはずの指輪がなかったのだ。

ランスが飛びかかった時に、落としてしまったのだろうか……。つい先ほどまで自分達を狙っていた二人組みだ。そのまま持っていつて売ってしまえば、それなりの金になったのだが。

ランスは一瞬で警戒態勢をとる。

「やだあ、ありがとう」

しかし、エリスは何の警戒心もなしに二人組みに近づいていった。「……………」

その行動に、ランスは開いた口が塞がらなかった。先ほど、エリスに、あの二人組みが自分達を狙っていると告げたばかりである。しかも、エリスは彼らのことを「小悪党」と言い、退治しようとして街中で発砲したのである。エリスは、二人組みの認識を、小悪党から「自分の指輪を拾ってくれた親切な人」に変えたようだ。世間知らずにも程がある。

と、エリスが長身の男の手から指輪を取ろうとした瞬間、男はエリスの手首を掴み、そのまま背中に回した。

「ちよつと……あんた達！」

「静かにしろ！」

エリスの首筋に、キラリとナイフの刃が突きつけられた。

「そうそう、この腕輪が銃になってたんだよな」

男は、エリスの腕にあるブレスレットに目を向けた。

「まだ市場に出回ってないものだろう？ どちらから手に入れたんだ」

小柄の男は、ニヤニヤしながらそう言うと、エリスのブレスレットを腕から抜いた。

抵抗しようとしたエリスだが、流石に喉元のナイフが気になるらしく、大人しくされるがままになっていた。

「この銃は、もらっておくぜ。まだ出回ってないなら、使い道はいっぱいありそうだ。ついでに、その姉ちゃん、手に持つてる荷物も全部置いてもらおうか？」

女二人組みに見えるエリス達は、武器を持っているとはいえ、狙いやすかったのだろう。小型銃を手に入れて、強盗でもするつもりか、どこかに売り飛ばすつもりなのか……。強欲な連中である。ランスは、捕まったエリスを一瞥する。

エリスは「せめて、私の物をコイツ等に渡すんじゃないわよ！」という目で、ランスをすごい形相で睨み付けている。

「……つく」

もう渡しちゃえばいいじゃないか……。それで丸く収まるんだから……。

ランスは、腿にある武器を手に取りようと、右手を静かに動かした。「おっと、動くんじゃないぞ、お嬢ちゃん」

エリスに突き立てた刃を少し動かしながら、長身の男は言う。

「少しでも妙なマネしたら、この女の命はない。死にたくなかったら、持つてる荷物全部こっちによこしな」

ニヤニヤしながら、小柄な方の男がランスに近づいてきた。手には、ナイフを持っている。ランスは、そのナイフとエリスを交互に見ながら、どうすべきか頭をフル回転させていた。荷物を大人しく渡せば、二人とも無事ですむ。しかし、エリスは、荷物を渡すなど

無言の脅迫をしてくる。荷物を渡してしまえば、別の意味でランスはひどい目に会うだろう。

なぜ、命と荷物を天秤にかけて悩まなくてはいけないのか、ランスは悲しくなってきた。ランスは、素直に荷物を渡そうと、一歩前に出た。刹那、空気に違和感を感じた。何かがおかしい、ということとはわかるのだが、何かがおかしいのかわからない。

「……なっ、なんだ!？」

ランスの方へ歩いてきた小柄な男が、道の真ん中で妙な動きを始めた。見えない壁に行く手を阻まれているかのように、身動きできずにいた。壁に体を押し当てているように、身体が不自然に斜めになっていた。

「どうした?」

不思議そうな顔をし、長身の男がエリスからナイフを緩める。

その瞬間、赤毛の男が動いた。ポケットに入れていた右手を素早く出し、長身の男に手のひらを向ける。轟音と共に、一陣の風が巻き起こり、長身の男を吹っ飛ばす。自由を得たエリスは、こちらに走り寄ってこようとしたり。が、小柄な男同様、見えない壁に阻まれたのか、何かにぶつかり、しりもちをついてしまった。

「……いったあ……」

「そのまま動かないで」

赤毛の男は、言うが早いか今度は小柄な男の方へ手のひらを向ける。長身の男と同様、彼も突風に吹き飛ばされた。目を回しながら、だらしなく仰向けになっている。

「とりあえず、二人とも気絶させた。逃げるなら今のうちだが?」

再び右手をポケットに入れながら、赤毛の男はランスの方を向いた。

「とりあえず、私を何とかしなさいよ! 何よ! 何でそっちにいけないわけ!？」

「ああ、悪い。もう大丈夫だ」

エリスは、近くで目を回している小柄な男から奪われたブレスレ

ツトを取り戻し、赤毛の男の側までツカヅカと歩いてくる。

「なによ、どういうわけ？ あなた何をしたの？ ちょっと……」

エリスは、助けてもらったお礼も言わず、赤毛の男につめよる。

「まっ、まずは助けただいてありがとうございます」とございました」ランスは、エリスの言葉を制してお礼を告げる。深々とお辞儀をし、ニコリと笑うと「魔法使いですね？」と質問した。

「かなりの使い手をお見受けしましたが……」

「障壁の強度をあげただけだ」

「え？」

「何をしたって聞いただろ？ 魔法障壁の強度をあげたんだよ。はじめの弾丸の時も、今も、目に見えないからわからなかったかもしれないが……。あと、奴らを吹っ飛ばしたのは簡単な魔法だよ。魔法を知らないのか？」

赤毛の男は、相変わらずバンダナで表情が見えないが、少し笑ったように見えた。

「うちの国はね、魔法なんてチンケなもん使わないのよ！」

エリスは、赤毛の男に向かって啖呵をきる。腰に手を当て、ランスをいつも叱る時のように、男を睨み付けた。

赤毛の男は、軽くエリスを見下ろしていたが、突然、手をかざした。その瞬間、地面に火柱が立った。

「……なっ」

ランスは、突然の出来事に驚き、エリスをかばうように一歩前へ出た。

赤毛の男は、火の海となった方へゆっくりと歩いていく。火は、

一瞬男の背の高さ程燃え上がったが、今は腰の高さ程度になっていた。

「そのまま逃げれば許してやる。まだ何かするつもりなら、この炎で焼き尽くすぞ……」

火の海の先には、先ほど吹っ飛ばした二人組みがナイフを手にし、こちらへ向かってこようとしているのが見えた。が、すぐに踵を返

し逃げていった。それと同時に火もゆつくりと消えていった。

なるほど……、これは威嚇のためだったのか……。

「危ないところを三度も……。ありがとうございます。私の名前は、ランスロットと申します。あなたのお名前をお聞きしても？」

「名前か……。好きに呼んでくれていい……。それにしても……。お前は男か？」首を傾げて腕を組み、赤毛の男はランスを眺める。

ランスは、それに答えるべく、力なく笑った。

フィラ国城内、エリスの私室に三人はいた。

助けてもらったお礼を、と、ランスが赤毛の男を城に招待したのだ。それに、城下町で垣間見た黒魔法の腕前にも興味があったのも事実だった。

「今更だけど……。名前がないと呼びにくいわね。『ミカエル』と呼ぶわ。わかった？」

エリスは、食後の紅茶を飲みながら赤毛の男に言い放った。

「……。ミカエルか……。好きに呼んでくれとは言ったが、それは……」

「聖書によると、墮天使ルシフェルを討ったのは大天使ミカエルとなっているわ。あなたにピッタリの名前だと思うの」

エリスは、赤毛の男の発言を無視し、まるで小悪魔のようにニヤリと笑った。何か企んでいる時に、エリスがする表情であり、その発言から、ランスは彼女が何を考えているか容易に想像ができた。

「わかった……。好きに呼べといったが……。アッシュと、アッシュと呼んでくれ……」

赤毛の男は、ミカエルという名前がよっぽど気に入らなかったのか、焦る様に自ら名前を提示した。

「しかし姫様……。まさか戦争を始めるつもりですか？」

「あなたにしては勘がいいわね、ランス」

「アッシュ殿の腕前には、正直なところ興味はありますが……。戦争には反対です」

ランスは、テーブルを叩いて立ち上がった。エリスは、腕を組みながらランスを睨み付ける。

「ランス、あなたは私に意見する権限はないの。黙って座りなさい」
「おいおい……、戦争って姫さん。俺もそんなのに手を貸す気はないぜ？」

アツシユは、エリスの方を向くとあきれたように言った。

「あなたにも断る権利はないのよ。先ほど助けて頂いたことは感謝します。でも、あなたをここから出すわけにもいきません」

エリスは、右手をゆっくりと上げると指をパチンと鳴らした。と同時に、ドアの外から十数名の兵士が入り、アツシユはあつという間に囲まれてしまった。

「この部屋には、アンチスベル対魔法装置が仕掛けてあるの。無駄な抵抗はやめなさい。あなたには協力してもらおうわ」

「姫様！」

言うが早いか、兵士はランスにも刃を向ける。ランスは、唇を噛みながら一歩後ずさりをした。

「あなた程の使い手が、他の国に取られるとフィラ国が困るのよ。癪に障るけど、今の私たちじゃ、あのルシフェルにはかなわない……。だから、同等の力を持っていそうなあなたに協力してもらおうわ」

「対魔法装置だと……？ その割りにはこの姿のまま……」

「何をブツブツ言っているのよ！」

エリスは、首を傾げたまま口をもごもごと動かしているアツシユを睨んだ。

「あのなあ、俺は戦争には興味ない。他の国に協力することもない。どいてくれ」

アツシユが一歩踏み出そうとした瞬間、兵士が構えていた槍を顔の前で交差させる。

「魔法には魔法をぶつけてみるわ！ あなたなら、あのルシフェルに対抗できるかもしれない」

「ルシフェルなんて知らねえよ！ 俺にそんな魔力もない！ 戦争

に協力するつもりもないんだ！」

言うが早いか、アツシユは目の前の兵士の手元を蹴り上げる。そのはずみで、兵士が持っていた槍から手を離すと、すかさずアツシユはそれを奪う。

一瞬で、アツシユは部屋の状況を確認する。

入り口は背後……、窓は遠い……近くにあるのはテーブルか……。兵士の数は十五人。俺の周りにいるのは十三人……。随分となめられたものだな……。

「衛兵！！」エリスは、テーブルを思い切り叩きながら怒鳴る。

その声と同時に、あっけに取られていた兵士達が再度アツシユに刃を向けた。

「俺の力が魔力だけだと思ふなよ」

アツシユは、エリスに向かってニヤリと笑うと、槍を床に突き刺し、まるで風に舞う木の葉のようにふわりとその上に乗る。軽く膝を曲げてしゃがむと、一気にバク転し、兵士を飛び越える。その時、目が隠れるほど深く巻いたバンダナが、ハラリと落ちた。バンダナの下に隠れていたその瞳は、すごい眼光を放っており、深い緑であった。少し目つきが悪いものの、想像通り整った顔をしており、美しい顔立ちをしていた。

お見事……。と、ランスはアツシユのその素顔と一連の動作に関心して、思わず拍手をしてしまった。

「悪いな」

アツシユは振り返ってそう言うと、扉を開けて出て行くとした。が、兵士はこの部屋の中だけではなかった。扉を開けた瞬間、ガチャリと音がして、一斉にアツシユに銃口が向けられる。その数数十人。その後ろに控えた兵士を入れれば百は有に超えている。城下町でしたように、魔法障壁の強度を上げようと、アツシユは集中力をあげたが、強度をあげることではできなかった。対魔法装置は、部屋の中だけでなく、城内にも効いているらしい。

くそ……。この姿じゃ分が悪いか……。だが……。

「俺をなめるなよ」

アッシュは、そう言うと、さらに魔力を上げようと集中する。スプリングラのように天井にはりついていた対魔法装置に、電流が走る。バチバチと音を立て、今にも壊れそうな悲鳴をあげている。それを見た兵士達はどよめき、一步後にひく。

「何するのよ！」

兵士達が動かないのを見かねて、槍を振り上げながらエリスはアッシュに突進した。そして、その頭上に思い切り振り下ろす。金属の部分が脳天を直撃し、目の前で火花が散ったように見えた。

「グハッ」

不意の出来事に、アッシュは対応できず、おもいきりその攻撃を受けることになってしまった。そのまま床に倒れ、うめき声を上げる。

「対魔法装置は、国家予算レベルなんだからね！ まだ開発途中で数も少ないし……、壊されたらたまったもんじゃないわよ！」

エリスは、倒れたアッシュの頭や背中を槍の柄でバシバシと叩きながらそう言った。

「何してるの！？ 早く捕まえなさいよ！」

エリスは、一連の出来事をぼんやりと見ていた兵士達を叱咤する。ハツとした兵士達は、是が非でもアッシュを押さえようとその上にかぶさっていった。小学生が放課に、教室の後ろでプロレスごっこでもやるように、アッシュ一人に何人も兵士がその上に山を築いていた。鎧のせいで、金属の擦れる嫌な音が響く。そして、その重みで、エリスの最初の一撃によつてすでに気を失っていたアッシュはもちろん、下の方にいる兵士は、息ができずに気絶する。

いとも簡単にアッシュが取り押さえられる様を見ながら、ランスは冷や汗を流す。城下町での一件と、対魔法装置をオーバーロードさせる程の魔力を持つアッシュに、たった槍一本で向かい、しかも気絶させてしまったエリスを、一体誰が止められよう。こうして、ランスにまた一つ、「エリスに逆らうところなる」というトラウマ

が刻まれる。

「とりあえず、鎖に繋いで牢屋にでも入れといてくれる？」

エリスは、腰に手を当てて、アッシュを見下ろしながら言う。

「ちょ、ちよつと待ってください！ アッシュ殿は、我々を助けてくれたのですよ？ お礼の為に城へ招いたのに、牢屋に入れるなんて……」

ランスは、エリスの腕を掴んで哀願した。

「うるさいわね。この男は私に逆らったのよ。当然でしょ」

「しかし……」

「今度こそ、ルシフェルに勝ってやるわ！」

エリスは、そう言うのと、近くにいる兵士にアッシュを牢屋へと連れて行かせる。

「開発中の、お仕置き装置でも取り付けて、『はい』というまで逃がさないわよ、お　　っほっほっほっほ！」

廊下に響くエリスの高笑いに、ランスはさらに冷や汗が出る。

お仕置き装置って……、まさか俺の為に開発してるんじゃない……

ランスは、キリキリと痛む胸と胃を押さえながら、連れて行かれるアッシュの背中に同情した。

第1章 始まり【2】

パールミレイ城は、機械仕掛けのフィラ城とは違い、古きよき城であった。

まさに、おとぎ話に出てくるような石造りの古城で、城内には上等な赤い絨毯が敷き詰められ、ありとあらゆる箇所には細やかな細工を施した造りであった。一件貧弱に見える古城であったが、巨大な魔方陣の上に建てられた城で、常に外敵から守られていた。現国王のアーサー・パールミレイの時代になってからは、城の中にも術が施され、さらに厳重になっていた。

静かで荘厳なパールミレイ城だが、今日は慌ただしかった。

フィラ国の使者が、パールミレイ国王に謁見を求めてきたのだ。

理由は、場内の者全員が安易に想像できた。戦争である。「今度はどんな理由なのか」と、みなが噂をし、仕事の手を休めていた。

そんな中、ルシフェルは黒魔法軍の野外訓練場にいた。

野外訓練場は、大魔法の演習をする時に使う施設である。戦場で使う大魔法の訓練などに使っており、今日は新人隊員への指南と通常の魔法訓練が行われていた。

ルシフェルは軍を束ねる総帥として、新人隊員指南と通常訓練を監視していた。新人隊員といっても、みなルシフェルよりも年齢は上である。幼い頃から、ルシフェルが魔法軍に入り、現在は総帥の座に登りつめていることを知っていても、やはり年下ということに抵抗があるらしく、不満な表情を見せる者も中にはいる。魔法軍にいる誰もが、一度は思うことであったが、次第にルシフェルの力を目の当たりにし、敬意を表すようになるのだった。

小さな軍服を身にまとい、ルシフェルは後ろに腕を回し、訓練場をゆっくりと歩いていた。ちょうど新人隊員への指南をしている集まりの脇に、ルシフェルは差し掛かっていた。

「……魔法障壁は、魔法使いの基本であり、意識しなくとも常に身

にまとえるようにならなくてはならない。いつ、どこから何かが近づいても、その障壁がクツションの変わりになり、ある程度自分の身を守るのです」

今日新人隊員への指南を担当しているのは、第五部隊隊長のジェイクだった。年は二十五歳。

魔法使いの全盛期は、一般的に二十歳〜三十五歳の間である。前線で活躍する多くの隊長クラスはこの年齢であり、それ以上の年齢になると城内に施された魔法の維持にまわる。十歳で総帥まで登りつめたルシフェルの出世は異例中の異例だった。

「おい、見ろよ、総帥があそこ歩いてるぜ」

新人隊員のうちの一人が、自分達のすぐ脇を歩いているルシフェルを見つけ、隣の隊員に耳打ちをする。

「なんだよ、ちゃんと隊長の話聞けよ」

「聞いているからこそ、本当に魔法障壁が常に身にまとっているものなのか試すんだよ」

「はあ？ お前何言ってるんだよ」

「見てな」

そう言つと、足元に落ちていた少し大きめの石を拾い上げ、手に握る。チラリと横目でルシフェルを確認すると、彼女は、上の空で別の方向を見ながら歩いている。ジェイクが本に目を落とした瞬間を狙って、彼は、ルシフェルに向かって石を投げた。

それに気づいた他の新人隊員達がアツと息を呑んだ。ジェイクはその声に気がつき、本から目を上げた。

「お前ら、人が説明してる時に何を話して……」

ジェイクは、新人隊員達の三分の一が見ている方向に目を向ける。それを見ていたほかの隊員達も同じ方向を向く。

見ると、投げられた石が今にもルシフェルに当たりそうになっていた。が、ルシフェルの近くで、石が失速した。その存在に気がついたルシフェルは、それを掴み、ジェイクの方を見る。

「お前か」

ルシフェルは、石をジェイクに放り投げる。

「ちつ違います！ 私が総帥にそんなことするわけありません！！」
ジェイクは、ビクツとして直立した。

「今、魔法障壁の話をしていたな。大方、私が常に身に纏っているか試したんだろう」

ルシフェルに向かって石を投げた男の子が、ビクツと肩を震わせる。それをルシフェルは見逃さなかった。

「いいだろう、お前。許してやるから前へ出る」

ルシフェルは、表情のない顔でそう言うと、石を投げた隊員を目の前に立たせた。

「名前」

「え？」

「名前は」

ルシフェルは、腕を組み、自分よりも一〇センチは背が高い隊員を睨み付ける。

「エ……、エドワードです……」

エドは、怯えながら、震える口でようやくそう答えた。

「エド、魔法障壁は強度をあげれば色々なことができる。もちろん、自分の意思でその範囲も広げることができる。例えば、こんなこともできるぞ。お前らはエドをよく見てろ」

ルシフェルは、そう言うで一瞬目を閉じ、息を大きく吸い込んだ。そして、目を開いた瞬間、エドは、何かにはじかれたように後方へ吹っ飛んでいった。

「障壁の強度をあげ、範囲を一気に広げた。障壁は人も吹っ飛ばせないがな。エドよりも手前にいたのに、なんら影響をうけていないジェイクがよい例だ。お前らもエドみたいに吹き飛ばされなくなったら、障壁を身につけるんだな」

ルシフェルは、エドと座っていた新人隊員達を一瞥し、ジェイクに近づくと少し口角を上げながら耳打ちした

「ジェイク……、毎度のことだが、新人隊員の中に私のことが気に食わない奴がいるな」

「総帥、もしかしてまたやるんですか？」

ジェイクは、一步後ずさりをして、眉をひそめた。

「特別に、お前達に魔法使い同士の戦いを見せてやるう」

ルシフェルは、新人隊員達の方を向くと、口の端だけを上げて笑った。そして、通常訓練をしている方へと視線を向ける。

「ジェイク、私は向こうから適当に見繕ってくるからお前は準備している」

そう言い残してルシフェルが去ると、ジェイクは肩を落としたり。

「ジェイク隊長、いつたい何が始まるんですか……？」

吹っ飛ばされたエドは、自分の座っていた場所へ戻りながらジェイクに質問する。それに呼応して、新人隊員達は口々に疑問を投げつけてきた。

「総帥が、お前達に魔法戦とは何かを指南してくださいさるんだよ……。さあ、危ないからもう少し下がって。みんなを守ってくれる隊員達を、今総帥が連れてくるから。真ん中は少し空けて……、三重の障壁を作るのに、三人来るから、真ん中はあけるように……」

新人隊員達が、列を二つに分けて各々の位置につく頃、ルシフェルも三人を連れて戻ってきた。

連れてこられた三人は、新人隊員達の列の合間にそれぞれ立つ。

「また総帥のお遊びだ。怪我したくないからがんばってくれよ？」

「グレイ」

向かって右端に立った男は、真ん中に立った男にそういった。

「そうだよ、俺たちはお前の補助みたいなもんなんだから」左端の男も、続いて言う。

グレイと呼ばれた真ん中の男は、長身で、金色の髪を真ん中で分けた好青年の風貌だ。グレイは、ルシフェルと同時に魔法軍に入軍して七年、付き合いは長い。ルシフェルと仲が良かったせい、訓練にも一層力がはいつており、実力は彼女に次ぐ。副総帥の肩書き

を持つており、第一部隊の隊長も兼任していた。魔法軍の中では、ルシフェルのよき理解者である。年は、今年で十九になる。

「俺だって、総帥のを受け止めるので精一杯なんです。先輩たちこそしっかりしてくださいよ」

グレイは、両脇の男を軽く睨み付ける。

右端にいる男の名前は、レイ。グレイよりは背が低く、口ひげを蓄えた彼は、グレイの一つ年上で二十歳。役職は、第二部隊隊長であった。

左端にいる男の名前は、ケン。浅黒い肌に黒髪の彼は、二十二歳。役職は、第三部隊隊長である。

そうしている間に、ルシフェルとジェイクは少し離れた場所で見合いを取って立っていた。ルシフェルは、まるで戦いの女神のように凜と立ち、ジェイクを見つめていた。一方ジェイクは、世界一の黒魔法使いを目の前に、祈るような形で集中力を高めていた。

「ジェイク、そう気張るな。あいつらに灸を据えてやるだけだ。手加減はする」

ルシフェルは、少しも表情を変えずに言う。そのせいでジェイクは、余計に怖くなってしまった。

「いいか、お前ら、よく見ておけ！！これが魔法使い同士の戦いだ！！」

言うが早いか、ルシフェルの半径一メートルあたりの砂がいつきに舞い上がる。と同時に、ルシフェルは両手を身体の少し後ろ側から一気に円を描くように顔の前へ移動させる。そのまま顔の前で手のひらをクロスさせ、再度、身体の脇へと引き戻した。すると、突風が轟音と共にジェイクへと襲い掛かる。

ジェイクは、障壁の強度を一気に上げて凌ぐ。そして、すでに詠唱にはいつているルシフェルを追いかけようと詠唱を始めた。

「今のが障壁だ！あの程度の魔法なら障壁で十分耐えうる！」

ルシフェルは、呪文を詠唱しつつも、新人隊員達の為に声を張り上げた。よほどの使い手でないと、詠唱中に会話を挟むことはでき

ない。

先に動いたのは、ジェイクであった。ジェイクが詠唱終了と同時に手のひらを地面に強く当てる。すると、地面から巨大な石がいくつも生え、急速にルシフェルの方へと向かっていった。

ルシフェルは、それが自分まで半分の距離に縮まった頃、両手を前に突き出した。すると、その周りに氷の刃が生まれる。空気中の水が、魔力によって氷へと変わったのだ。それは、鋭い刃を光らせながらジェイクと向かっていった。

ルシフェルは、迫る巨石の攻撃を飛んでよけた。そして、つきあがった巨石の一つに着地すると、短く詠唱してさらに跳ぶ。

一方、氷の刃からの攻撃を風の壁を使ってはじいたジェイクは、跳んだルシフェルを眺めていた。すると、ルシフェルの手のひらが光った。と、同時にジェイクも手のひらに光る球体　　自らの魔力を練り上げたエネルギー弾を作り出す。それは、ルシフェルの手にあるものと同じであった。

地面に着地する間に、ルシフェルはあらゆる角度からエネルギー弾をジェイクへと発した。ジェイクは、そのエネルギー弾に、自分が作り出したものをぶつけながらよけていった。しかし、ルシフェルが作り出すそれに追いつかなくなり、次第に一つ、二つとジェイクの身体の側を通り過ぎ、後方の地面で爆発した。新人隊員達の近くでもいくつか爆発したが、三人の隊長が張っている防御壁のおかげで、粉塵はもちろん、風すら届いてこなかった。

「グレイ副総帥」グレイの側にいた新人隊員が、戦っている二人の方を見ながら言う。

「どうした？」

「今、ジェイク隊長の脇をエネルギー弾が通り過ぎましたが、ジェイク隊長の魔法障壁はどうなったんですか？」

「ああ、魔法障壁にも魔力と集中力がある。それにあわせて範囲を自分の身体にそって狭くしたりするんだよ。それに、時と場合によつては障壁を展開できなくなったりするんだ。こういった接近戦の

場合、相手の攻撃や、自分の攻撃に集中して障壁が脆弱になったりするところがある。ジェイク隊長は前者で、範囲を極端に狭くしているね。でも、総帥と目が合った際に障壁が消えそうになってる。あの人総帥には弱いから……。あ、総帥に弱いのはみんなか」

グレイはクスクスと笑う。質問した新人隊員の顔が、それを見てひきつった。

その間にも、ルシフェルとジェイクの戦いはどんどん展開していく。

ある程度の間合いを取っていた両者だったが、今はルシフェルがジェイクの方へかなり近づいていた。それに伴いジェイクも後退していたが、離れる隙を与えないかのように、ルシフェルは攻撃の手を休めなかった。

「ジェイク ……!!!」

ルシフェルは、叫びながら突風を巻き起こす。

周囲の風が渦を巻き、ジェイクへと襲い掛かる。その風に巻き上げられた周囲の小石も凶器となり、ジェイクへと向かっていく。

背中に刺してあった長剣を、ジェイクは引き抜いた。

飛んでくる小石をその剣で捌き落としながら、ジェイクは走り出した。そして、向かってくる竜巻に飲み込まれてしまった。しかし、数秒後、竜巻の中からジェイクは剣を振りかざし、無傷で飛び出してきた。ルシフェルも、それを見て腰の剣を引き抜く。

「おおおおお！」

ジェイクが雄たけびを上げ、その剣を一振りすると、瞬時に周囲の空気が凍り、剣は氷の刃を纏う。

「渦巻け！紅蓮の炎！」

そう言っつて、ルシフェルは右手で剣をひと撫でする。と同時に、剣はその身に炎を纏った。

お互いの剣の間合いに入った。

ジェイクは、ルシフェルよりも高い自分の身長を生かし、頭上から剣を振り下ろす。ルシフェルは、十字にそれを受け止めると、右

足でジェイクの鳩尾に蹴りを入れる。しかし、それに気がついたジェイクは、左腕でそれを受け止める。

瞬間、二人は距離をとるために離れる。

「新人隊員達に、魔法戦を見せたいのだが、これじゃあ剣術の勝負になっってしまうな」

「魔法剣も、魔法戦の一種でしょう」

ジェイクは、左足を一步踏み出した。同時に剣を真一文字に左から右へ横に振りぬく。すると、氷の刃が生まれ、ルシフェルへと飛んでいった。

ルシフェルは、それを見て剣に意識を集中させた。剣に纏っていた炎がゴウゴウとさらに燃え出し、ルシフェルの左腕の肘の部分まで火があがってくる。同じように、ルシフェルは、右から左へと剣を真一文字に振りぬく。氷の刃は、炎につつまれ、溶かされていった。

「剣術が得意なお前と、剣の腕で勝負するのは分が悪い。私は、あいつらに私の力を見せてやりたいんだ」

そういうと、ルシフェルは剣の炎を使って地面に図形を描き始め、魔法陣を形成する。ジェイクは、それを阻止すべく近づいたが、ルシフェルに空いた右手からエネルギー弾を投げつけられ、それを打ち返すのでいっぱいであった。そうして、魔法陣が出来上がり、ルシフェルはその中央に剣を突き刺した。すると、それに炎が移り、煌々と光り始めた。

「総帥!?」グレイは、その魔法陣を見て驚いた。

「お前たち、少なさかれ!」

ケン は、新人隊員達をさらに後ろに非難させる。

ルシフェルは、ジェイクが近寄れないように、自分の前方に何本もの火柱を作り上げると、詠唱にはいった。

阻止することをあきらめたジェイクは、剣を背中の中に戻し、今からルシフェルが繰り出そうとしている魔法に、どう対抗すべきか、頭をフル回転させる。そして、意を決して詠唱へとはいる。

ルシフェルの詠唱と共に、空に雲が集まり始める。あたりから太陽の光は消え、風が吹き、遠くで通常訓練していた者達も、異変に気がつき、手を休めた。

「ありやあ、総帥とんでもないことを……」

「召還魔法か……。新人隊員達にえらいもん見せるなあ」

自分達もとばかりを食わないように、訓練していた他の隊員達も少し離れることにした。

一方、渦中の新人隊員達の方では、何が起こっているかわからず、ざわつきはじめていた。

「グレイ副総帥、いったい何がはじまるんですか？」

「総帥のあれは、召喚陣だ。何かを召喚するらしい。全く……。召喚士でもないのに何であんなことできるんだか」

グレイは、軽く溜め息を吐いた。

「召喚魔法！？ 黒魔法使いに召喚魔法が使えるのですか？」

「だから、総帥は特別なんだよ」

魔法使いと召喚士は、別物であった。魔法使いにも様々な区別があるが、多くは自然界の四大元素の力を借りて、魔術を行使していた。一方召喚士は、魔方陣や触媒、または契約などで異世界との門を開き、この世界に魔物を呼び寄せていた。そもそも、両方共素質がないとできないもので、誰にでもできることではなかった。しかし、ルシフェルにはその力があつたのだ。さらに、齡十二歳にして、他の大人が読む以上に大量の魔導書を読み、努力を惜しまなかつた。『絶対的な力を手に入れること』が、国王の教育であり、その力を持つて、他者を支配することが国王の理想であつたからだ。

ルシフェルの前方にある召喚陣が、一層光を強めた。すると、ルシフェルの後方に巨大な門が地表からゆっくりと迫りあがってきた。くすんだ銀色のそれには、鎌を持った骸骨と、人間の姿が彫られていた。否、彫られているものではなく、それはゆっくりと動いていた。彫刻のような姿の人間が、逃げようともがいていたのだ。骸骨は、動かさず、それをじっと見ているだけであつた。その門の周りに

は茨が張り巡らされており、重々しい雰囲気を醸し出していた。
地獄の門である。

「……ひ……ッ」

新人隊員達は、腰を抜かし、その場に呆然と立ち尽くした。

「……出でよ！！ 地獄の門番！！」

ルシフェルが、両手を広げ天を仰ぐ。すると、頭上から眩いばかりの光と共に轟音がし、一筋の光が門に落ちた。それは、金色の龍の様な稲妻であった。稲妻を纏い、地獄の門は金色の光を帯びた。そして、ゆっくりと門が開き始める。煙のような霧が、ふわりとそこから地を這うように湧き出てきた。

「フウウウウウ……」

獣の吐息が漏れる。続いて暗闇の中から、毛むくじゃらの足が突き出てきた。白銀に近い毛並みは立派だったが、逆立っていた。

ケルベロス……

レイは、ゴクリと唾を飲む。

新人隊員達の数名は、ケルベロスの姿を見て失神してしまった。

ルシフェルの背丈の、優に二倍はある巨犬が、その姿の全貌を現した。尻尾は蛇、三つの頭を持つ巨大な犬。それが地獄の門番、ケルベロスであった。深紅に光る瞳が、新人隊員達をギロリと睨む。そして、目の前にいるジェイクへと視線を向けた。

詠唱を終えたジェイクは、両手を広げた。その瞬間、目もくらむ程の光が辺りを照らす。巨大な光体が、ジェイクの真上に出現したのだ。燃えさかる太陽のように炎を吐くそれを、ジェイクがケルベロスへと向けてほうり投げるように両手を差し出した。ジェイクの手から離れたそれは、一直線にケルベロスへと向かっていく。

「なめるな！」ルシフェルは、そう言って両手をその光体へと伸ばす。

ルシフェルは、光体が衝突する前に詠唱を終わらせようと、早口で詠唱をする。迫り来る光体を前に、焦りもせず無表情でいるルシフェルに、新人隊員達はもちろん、グレイ達も息を呑んだ。まぶし

い光が辺りを包み、ルシフェルをも包もうとした瞬間、空気を震わせるような爆音と共にその光体が爆発する。

爆風と共に粉塵が巻き上がり、全員の視界を奪った。三人の隊長は、爆風に押されまいと魔力を防御壁へと集中させる。少しでも気を緩めると、一気に吹き飛ばされそうな勢いに、三人の額に汗が滲む。

次第に風が弱まり、徐々に視界が晴れ、砂の向こう側に二人の姿がぼんやりと見えてくる。

グレイは、ホツと胸を撫で下ろした。

「い、今のは……」新人隊員は、裏返った声でそう言った。

「うーん……、呪文も聞こえなかったし、まぶしくてよくわからなかったけど、おそらく、同じ魔法で相殺させたんじゃないかな」

「だろーうな……」

「同じ魔法で、お互いのそれを爆発させたんだろーう」

三人は、お互いに顔を見合わせて納得したように頷きあう。

砂塵が全て舞い降り、視界がクリアになる。ルシフェルはケルベロスの足に寄りかかりながら、ジエイクを睨みつけている。一方、ジエイクは肩で大きく息をしながら、膝をついている。

ルシフェルは、何事もなかったように軽く飛ぶと、ケルベロスの中央の頭の上に乗った。そして、優雅にその頭に座る。ケルベロスの吐く息が、白くあたりを曇らせる。その口の端から、ボタバタと唾液が落ちる。猛毒のトリカブトである。

「ふん……」

ルシフェルが、軽くケルベロスの中央の頭を撫でると、「ガアアアアアアアアアア」と雄たけびを上げた。それに呼応して、左右の頭も雄たけびをあげる。その三重の咆哮に、先ほどの爆発よりも激しく空気が震える。新人隊員達は一斉に耳を塞ぎ、何人かは失神した。防御壁が激しく振動し、三人の隊長も一歩後ずさりをした。

「隊長、もうやめてください！」たまらず、グレイが叫ぶ。

「もうこれくらいでいいか……」

ルシフェルは、ケルベロスの頭から飛び降りると、両手を広げる。すると、ケルベロスは再び咆哮し、ゆつくりと門の暗闇へと消えていった。と同時に地獄の門も地中に埋まり、雲も晴れ、再び空に太陽が戻る。

「ジエイク、もういい。来い」

ルシフェルは、ジエイクにそう言うと、新人隊員達の方へ歩いていった。見ると、半数が失神し、意識があるうちの数人は茫然自失であった。それを確認すると、ルシフェルは左手を軽く上げる。空中で大きく円を描くと、新人隊員達の頭上に同じように大きな円が描かれた。ルシフェルが手を下げるとその円から大量の水が降ってきた。

「ぶっ」「うわっ」「げほっ」という声と共に、失神していた隊員は意識を取り戻し、茫然自失だった隊員は、我に帰る。

「こえええ……」。

そこにいた隊長三人は、目配せをして肩をすくめる。こうやって、否定的な輩を脅すのを見るのは、もう幾度と経験していた。ルシフェルが班長になった時、部隊長になった時、総帥になった時、その都度、気に食わない輩はでてくるわけで、ルシフェルは、毎回、自分の力を見せるデモンストラーションのようなものを好んで行っていた。

「訓練はまだ終わってないだろう。今ので気を失った奴は、戦場でも命を落とすと思え」

ルシフェルは冷たくそう言い放つと、グレイ達にも戻るように指示をし、再び歩き始めた。

その時、遠くでルシフェルを呼ぶ声があった。

「総帥……！ 総帥……！」

見ると、城から訓練場へと続いている道を、一人の男が走っていた。

魔法軍本部で執務を行っていた、第三部隊隊長のヨンジエである。ヨンジエは、少し天然パーマのかかった赤毛で、柔らかい印象の男

であつた。

はあはあと息を弾ませ、ヨンジェはルシフェルの前で跪き、丸められた皮羊紙を差し出した。

「総帥……、これを……」

結ばれた紐を解き、ルシフェルは片手でそれを振る。丸められた皮羊紙が、綺麗に開いた。ルシフェルの目が、ざつと皮羊紙の上をすべる。口の端を少しだけ上げて笑うと、隊員達の方を向いた。

「全員、本部に戻れ。訓練は終わりだ」

パールミレイ城に隣接する位置に、黒魔法軍の本部はあつた。

各部隊長の執務部屋や、作戦会議室、室内訓練所や資料室がそこにはあり、併設して隊員の宿舎があつた。

その本部の一角にある作戦会議室に、ルシフェルと、各部隊の隊長がいた。細長い楕円形になった机がその部屋にはあり、上座にルシフェルが座っている。その後ろには、パールミレイの国旗が堂々と飾られていた。

中央の空いたスペースには、台が置かれていた。ここには立体映像^{ホログラム}映写装置が置いてあり、主に、作戦会議などで使用していた。今は、何も映されていない。

「戦争だ。隣国のバカ共が、またやりあいたいらしい。懲りない連中だな」

ルシフェルは、椅子に座り隊長達の顔を見渡した。隊長達は、みんな押し黙り下を向いたり宙を見つめたりしていた。

心中は「またか」で、ある。

「今回は、どんな理由で……」しばらくの沈黙の後、グレイが口を開く。

「理由はどうだっていい。我々と戦いたいなら、相手になってやる。絶対的な力を見せ付け、二度と、我々に刃向かおうなどというバカな考えを持たないようにしてやればいいだけだ」

ルシフェルは、グレイをギロリと睨んでそういった。

「他に質問があるやつはいるか？ …… いないなら解散だ。各自下の者に伝える。開戦は明朝。総員でフィラ国からの攻撃を迎え撃つ」
ルシフェルは、そう言うのと皮羊紙を掴んで部屋から出て行った。
バタンとドアが閉まると、隊長達は次々に溜め息を漏らす。

「また戦争かよ」頭を掻きながらジェイクが言う。

「フィラ国も、本当に懲りないわね」

腕を組み、溜め息交じりにそう答えたのは第四部隊隊長レイチエルだった。レイチエルは、数少ない女性隊員のうちの一人で、隊長まで上り詰めたのは彼女一人であった。金色のゆるいウェーブがかった髪は、上手にアップされており、それが、彼女を知的に見せていた。年は今年で二十六になる。

「全く、これだけ世界に脅威を振るっている国だつてのに、なんでフィラ国だけは戦争をしたがるんだか……、しかも毎回負けるのに

……」

ヨンジェは、頭の後ろで腕を組み、口をとがらせて言った。

「そつだよな」。世界でこんだけ忙しい軍隊つて、俺達じゃね？」

ヨンジェに続けていったのは、第六部隊隊長のジョニー。金色の髪は、短髪で、魔法使いというよりは、格闘家のような印象を受ける男であった。年は今年で二十四だ。

「確かに、毎回我が国が優勢だ。しかし、フィラとてバカではない。毎回新兵器を導入してくる。甘くみないほうが身の為だぞ」

グレイは、愚痴を言っている者達を嗜める。事実フィラ国は、新兵器を開発しては、実践で使えるかどうか試すような形で戦争を起している。毎回、見たこともない機械で攻撃してくるので、その対処に混乱することもあった。

加えて、戦争の発端が、実にくだらなないこじつけであった。パールミレイ国国王も血の気が多く、難癖つけているだけの理由に、毎回応じている。フィラ国のプライドのおかげで、毎回宣戦布告をしてからの開戦であることだけが唯一の救いだった。

だが、毎回勝戦とはいえ、被害は大きい。

「しかし、陛下も総帥も戦争大好きだよなあ」

まだ少年臭さが抜けない顔の男が、そう言いながらあくびをした。黒い短髪に、大きな黒い瞳の彼は第九部隊隊長ケンで、年は今年で十九歳。本人は、この童顔にひどくコンプレックスを持っていた。

「ケン！ 滅多なこと言うもんじゃないわよ！」

レイチエルが、ケンの方を向いて一喝する。

「でも、俺総帥と同期だけだし、昔はもっとう……」

「さあ、無駄口たたいてないで開戦を部下に知らせに行かないと！」
グレイは、ケンの発言を遮って大声を出した。そして、部屋からみんなを追い立てる。しかし、出て行こうとするケンの腕を、グレイが強く引つ張った。ドアを閉めると、そこにケンを思いつきり叩きつける。そして、胸倉を掴んでグレイは顔をケンに近づけた。

「いつてえ……」

「ケン、俺もお前と同期だから、お前が言いたいことは良くわかる」
歯を食いしばり、搾り出すような声でグレイは言った。

「無論、俺たち同期だけじゃあなく、隊員達もわかっていることだ。だが、発言に気をつける。いいな！」

しばらく、グレイとケンはお互いに睨み合う。

「……わかったよ……悪かった」

ケンがそう言うと、グレイは手を緩めた。それを振りほどくと、ケンは足早に部屋を出て行った。

グレイは大きな溜め息をついて、近くにあった椅子にゆっくりと座った。

昔か……。

グレイは、右手で顔を支えながらもう一度溜め息をつく。
ルシフェルとグレイが出会ったのは、今から七年前。ルシフェルが五歳、グレイが十二歳の時だった。

パールミレイ国の全ての男子は、十二歳になったら魔法力テストを行い、成績が優秀な者が軍隊へ徴兵される。レイチエルのように女性で軍隊にいる者は、自ら志願して入隊してきた、言っなれば変

わり者だった。グレイも例に漏れずその試験を受け、成績が優秀だった為に徴兵された。そこでルシフェルに出会ったのであった。

まだ五歳のルシフェルは、驚くべきことに黒魔法の実力は群を抜いてトップであった。しかし、やはり子供で、少しやんちゃだった。《王族たるもの》としての教育を受けてはいたが、遊びたい年頃である。大人しく訓練を受け、相応に生活していたが、たまに悪戯をすることがあった。厳しい訓練の中、ルシフェルと同期の新人隊員は、そのルシフェルのあどけない笑顔が唯一の救いであった。

しかし、五年前のある日を境に、ルシフェルは急変したのだった。豊かだった表情は、一変してなくなってしまった。一切笑うこともせず、泣きもしない。悪戯をすることもなくなった。ただ、ひたすら力を追い求めるようになった。何も言わずに訓練を受け、何かに取り付かれたように、人一倍魔法の勉強に励んだ。そうして、今の地位に上り詰めたのだった。

一時期『国王に洗脳されたのではないか』という噂が立ったが、ルシフェルは正気で、洗脳された気配は一切なかった。

急変したルシフェルを、隊員全員がどう接していいか分からない中、グレイだけは、それまでと同じようにルシフェルに接していた。『ルシフェル様をそうさせたのには、深い理由があるのだろう』と、グレイは、一度もルシフェルに理由を聞こうとはしなかったし、表情や反応が薄いものの、根本的には変わらない彼女だということを、彼は良くわかっていた。孤立したルシフェルの側に常にいたのはグレイで、訓練の苦楽を共にしてきた唯一の友達のようなものであった。また、ルシフェルが魔法軍でどんどんのし上がっていくのを追いかけるように、グレイも昇進し、常に彼女の右腕として側に居続けていた。

ただ、気がかりだったのは、ルシフェルの根本的な考えであった。国王が教えた帝王学は《戦争を善とし、絶大な力で支配することに意味がある》というものである。ルシフェルは、国王の言葉を信じ、疑いもせずに今日まで過ごしてきたのだ。新人隊員達に自分

の力を見せ付けて服従させたことも、会議での発言も、その教育の賜物であった。

この七年間、ルシフェルの側にいたグレイは、その考えをどうにか変えようと努力をしたが、彼の言葉は届かなかった。グレイが、どう言おうとも、首を傾げるだけで、理解を示してくれなかったのである。

さて……、部下達に開戦を知らせにいかないとな……。

グレイは、ゆっくりと椅子から立ち上がると、会議室の扉を開けた。

こうして、戦争が始まった。

大きな流れの中の、ほんの僅かな時間。一人の少女の運命を変える程の、大きな出来事が始まったのである。

第2章 出会いと別れ【1】

その日の朝、黒魔法軍本部の一番奥にある部屋にルシフェルはいた。

部屋の大きさは、約十二畳。赤い絨毯が敷かれ、入り口付近に簡易応接セットが置かれている。部屋の一番奥には、十二歳の体には大きすぎる机が一つ。その後ろの壁には、パールミレイ国の国旗と地図が飾られている。

殺風景なこの部屋が、歴代の総帥の執務室だった。

ルシフェルは、ここで、戦況を聞こうと呼びつけた部下を待っていた。体につりあわない程大きな椅子に座り、腕を組んで眉間に皺を寄せている。その姿は、まるで老年のようだ。

開戦から一週間、おかしなことに、これまで優勢で事をすすめていたパールミレイ国が、今回の戦争では開戦当初より押されているのである。そのせいで、しばらく膠着状態が続いていた。

まだ噂でしかないのだが、開戦当初からフィラ国からの攻撃に、強力な黒魔法が混ざっていると言うのだ。しかも、どうやら複数ではなく、一人による攻撃との報告がある。

黒魔法国家パールミレイ国のナンバーワンは、ルシフェルである。単純に考えると、世界の頂点に立つ黒魔法使いは、ルシフェルということになる。彼女以外に強大な力を持つ者がいるのは、パールミレイ国にとつて、にわかには信じがたいことであった。

しばらくして、ドアをノックする音が部屋に響いた。

「総帥……」

聞き覚えのある声がドア越しに聞こえてくると、ルシフェルは組んでいた右手をスツと前に伸ばす。人差し指をドアノブの方へと向け、短い呪文を呟く。すると、目の前のドアが開き、グレイとレイがそこになっていた。グレイは、ドアを開けようとしていたらしく、ノブがあった部分に手を伸ばし、握手を求めるような格好になって

しまっていた。

「入れ」

ルシフェルは二人の姿を確認すると、必要な言葉だけ発し椅子に座りなおした。そして報告書と地図を机の上に広げる。

「失礼します……」

二人は同じ言葉を発し、ドアを閉めて机の前まで歩いてきた。

ルシフェルは、机の上の報告書と部下をしばらく交互に眺めた後、報告書に視線を固定する。

「隣国のアホ共に、何を手こずっている」

ルシフェルは、抑揚のない声でそう言うと、 그레이に報告書を投げつけた。皮羊紙でできたそれは、一メートルほど机から離れて立っている 그레이に当たる前に、力なく床に落ちていった。投げつけられた 그레이は、その軌跡を眺めていた。

「で、報告書にあつた、噂の魔法使いはいたのか？ 그레이」

ルシフェルは、猛禽類のように鋭い瞳で 그레이を軽く睨み付けた。

「あ、いえ……それはまだ、確認できておりません……」

그레이は、気まずそうに視線を落として言う。

ルシフェルは溜息をつきながら、落とした報告書を拾いに椅子から立ち上がり、二人の前に回る。身長一五〇センチ程のルシフェルは一七〇センチ以上ある彼らと並ぶと、見下ろされる形になる。が、二人はサツと片膝を立てて座る。 그레이は、その一連の動作の間に報告書を拾い上げていた。

「しかし総帥、フィラ国にいたと思われる魔法使いの攻撃は全て遠距離で、位置は特定できません……。慎重にその者の事を調べた方がよいかと思われませう」

그레이は、報告書をルシフェルに差し出しながら、今度は目を合わせて言う。

「確認できない程遠距離から、我が軍の野営を狙っているのか？不可能だ。近くにいるはずだろう」

「開戦当初は、我が国上空を飛行しております戦艦からのようです」

たが、今は大人しく、小型戦闘機に軽い魔法がかけられていたり、戦艦以外からの攻撃で……どこからなのか……」

報告書を受け取りながら、ルシフェルはグレイに視線を落とす。グレイは口を真一文字に閉じてルシフェルをジッと見ている。しばらく見合っただけだったが、グレイが静かに口を開いた。

「これまでの魔法攻撃は、全て人がいないところにされていきます」「遠距離の攻撃というのは、目標が絞りにくい。余程の使い手でなければ外れることの方が多いだろう？」

グレイは、ルシフェルをジッと見ながら黙り込んでしまった。

「総帥……あの……」

グレイに変わり、レイが口を開いた。

「申し訳ありません総帥……、実は、お話していないことがあります」

「ほう？」

机に報告書を置いたルシフェルは、手を後ろで組んでレイを見下ろした。少し、顔が熱かった。敵国の魔法使いの出現と、自分に隠されていた事があるということ、怒っているのかもしれない。感情を腹の底に沈めるように一呼吸置いてから、ルシフェルは二人の周りをゆっくりと歩き始めた。

「国境付近に、目くらましの魔法がかけてあります」

「お前がかけたのか？」

「いえ……フィラ国が……かけたようです……」

「なに？」ルシフェルは歩くのをやめ、レイを睨み付ける。

「敵国にいる魔法使いは相当な使い手です、総帥」

レイに変わって、グレイが再び話し始める。グレイは、真剣な目でルシフェルを見据えた。

「はじめに、前線配置の者から報告を受けました。数日前から、国境付近の川に霧が発生し、近づけなくなりました。あちら側にも同様の霧が発生しているらしく、前線での交戦はなくなりました」

「……………」

「おかしいと思い、私は何度も前線に近づきました……しかしダメなんです……。その霧の正体が目くらましの術で、私の魔力では近づけないんです……」

「あの連中が、目くらましができる機械でも発明した可能性は？」
ルシフェルは、グレイのすぐ前に移動して、腕を組んで机にもたれ掛かる。

「あれは……、魔法だと思われませう」

「ふん……」ルシフェルは、机の端に置いてあった腕章を腕につけながら、短く息をもらした。次に、護身用の長剣を腰のベルトに差し込む。

ルシフェルは、椅子にかけてあったマントを手にとると、二人の前で立ち止まった。

「なら、私が行って確かめてくる」

二人の間を通り、ルシフェルはドアに向かって歩き始める。

「総帥！ しかし、危険です！」

「お前が確認できないなら、他に誰が確認できるんだ？」

ルシフェルは、温度のない瞳でグレイを見下ろす。

「しかし……敵は正体不明な上に、総帥と互角程の力を持っているかもしれないんです……」

「怖いと思うのは、お前が弱いからだ」

ルシフェルは、そう言い捨てると部下二人を部屋に残し、ドアから出て行った。

長い廊下を歩きながら、ルシフェルは、噂でしかなかった魔法使いの存在を感じ始めていた。こういった術の類は、かけた本人より格下の者でないとかからない。グレイは、実際この国のナンバー1であった。その彼に破れない目くらましの術は、自分以外かけられるはずがないはずだ。

去っていくルシフェルの後ろ姿を、グレイは心配そうに見守っていた。

ルシフェルは、手早く移動する為にスカイボードに乗っていた。それは、かけられていている風の魔法によって動くスケードボードである。地面から軽く浮いている為に地形に左右されず、風に加護によって馬よりも早く移動ができる。戦場を駆け抜けるのには、これが一番都合がよい。

城下町を抜け、城から少し離れた場所で、激しく交戦している野営があった。そこを駆け抜けつつも、ルシフェルは何機か戦闘機を打ち落としていった。ルシフェルの魔力によって、スカイボードの移動速度は最速になっている。一瞬の出来事であったが、隊長や班長は、ルシフェルへの敬礼を忘れない。律儀である。

そうやっていくつかの野営を駆け抜け、ルシフェルは、国境付近の雑木林まで来ていた。

なるほど……、少し霧が出てきたな……。

ルシフェルは、そこでスカイボードを降り、脇に抱える。

あたりにうつすらと霧が立ち込めてきた。魔力が弱い者では、この霧を見る前に道に迷うだろう。

否、迷った事に気がつかない。それくらい、強い魔力が折り込まれた霧であった。そのせいで、ルシフェルは、肌が露出している部分に強い不快感を覚える。梅雨の、湿気の多い空気のような肌触り、誰かが自分のすぐ後ろにいるような感覚が、ルシフェルを襲っていた。敵国にいる黒魔法使いの存在を、嫌と言う程思いしらされる。存在だけでなく、その魔力の強さも肌を感じていた。

きっと、この目くらましの術をかけた本人には、私が侵入したことが筒抜けだろう。霧に折りこめられた魔力が、何よりの証拠だ。うつつうかしい……。

そんな不快感を振り払うように、ルシフェルは拾った枝を振り回して歩いていった。

ルシフェルは、いつ攻撃されてもいいように臨戦態勢をとっていたが、何もない上に、さほど迷うことなく国境の川まで辿り着いた。やる気満々だったルシフェルにしてみれば、全くの拍子抜けである。

ルシフェルは、背の低い木が密集している部分に身を隠し、しばらく様子を見る為に草の上につつ伏せになった。腰の鞆から双眼鏡を取り出し、目に魔力を集中させて辺りを見回す。川向こうにも霧の影響があり、どれだけ見ても木ばかりで、人の気配は全くない。霧といえば……、この大陸のどこかに霧に包まれた迷いの森があるって誰か言っていたな……。あれも、これと同じように誰かが目くらましの術をかけているんだろうか……。それとも自然現象なのだろうか……。

ルシフェルは、よそ事を考えながら双眼鏡を覗き込む。

やはり、いくら探しても人はいない。そう、術をかけた本人以外、向こうの国は誰も近づけないのだ。ルシフェルは双眼鏡を鞆に戻し、つつ伏せになったままの姿勢で目を閉じた。

随分、いい加減な術をかけたもんだな……。これ程の使い手なら、国境の川向こうは、霧が晴れるようにできただろう。これじゃあ、面倒臭いから適当に国境付近にかけておくかって感じがひしひしと伝わるぞ……。

こちらに攻撃を仕掛けている割には、未だに被害はゼロ……。術者に戦意はないのか？ フィラ国がどっかから拾ってきた助っ人の可能性もあるな……。それにしても、これ程の使い手をどこから……。

ルシフェルは、川向こうを観察しつつ、思考することに没頭し始めた。

第2章 出会いと別れ【2】

「ん……？」

フィラ国一の巨大な戦艦の中に、アッシュはいた。この戦艦は、つい最近グレードアップしたばかりのレーザー砲が内蔵されたものであった。フィラ国は、その新兵器をいつパールミレイ国の黒魔法軍相手に試そうか、と悩んでいた。万全の整備が整い、お昼すぎにドッグを出た戦艦は、まだフィラ国上空を飛んでいた。

アッシュの隣には、ランスが軍服を身に纏い、挿して数日経ってしまった花の様に頭を垂れている。時折溜め息については、チラリとアッシュを盗み見ていた。アッシュは、そんなランスにイライラしながら睨みつけていた。

「どうしたんですか？ アッシュ殿……」

うなだれながら、ランスが問う。

「お前さあ、ちょっとはシャキツとしろよな。俺は半ば拷問に近い形で、戦争に参加させられてんだぞ？ お前みたいに暗い奴が隣にいたら、ますますイラつくぜ」

「す……すみません」

ランスはアッシュにペコリと頭を下げると、一瞬、槍の様に真っ直ぐになった。が、すぐに萎れた花になった。

「……たく、俺にこんなもんつけやがって……」

アッシュは、自分の首につけられたよくわからない機械を手で触れる。そして、一週間程前の出来事を思い出し、溜め息をついた。

ひんやりとした冷気が頬をなで、アッシュは目が覚めた。ひどく頭が痛み、気休めに頭に手を添えようとすると、ガチャリと音がして腕は全く動かなかった。うつすらと目を開けると、そこは薄暗く、近くにある蝋燭が唯一の光源であった。自分の現状を把握しきれず、しばらくぼんやりとしていたが、目の前に鉄格子があるのに気がつ

き、覚醒する。

「なんじゃこりゃー！」

アツシュは、ようやく、鎖に繋がれ牢屋に入れられていることがわかった。

「ああら、お早いお目覚めね」

聞き覚えがある声に、アツシュは顔を向ける。そこには、クスクスと笑いながら歩いてくるエリスの姿がある。頼りない蝋燭の明かりがゆれ、エリスの顔に邪悪な影がゆらめく。アツシュには、それが悪魔の微笑みに見えた。

「てめえ、何のつもりだ！」

アツシュは、そう叫ぶと鎖を引きちぎろうと腕に力を入れる。しかし、ガチャンと音がするだけでびくともしない。魔力でどうにかしようとするが、対魔法装置がここにもあるらしく、全く魔力が上らない。チツと舌打ちをして、力を抜いてエリスの方を向き直る。「だって、あなた言う事聞いてくれないんだもの」

「つたりめーだろ！ 誰が好き好んで戦争なんかに手を貸すか！」
「だから、こうして説得しようとしてるんじゃない」

エリスは、コロコロと鈴のように笑う。上品な仕草をしているが、やはり悪魔である。アツシュは、眉をしかめてそれを眺めた。

「これのどこが説得なんだよ」

アツシュは、もう一度腕に力を入れて鎖を鳴らす。

「私はね、自分の思い通りに事がすすまないのは嫌なのよ」

「何を言われても、俺は戦争なんかに手は貸さねえぞ。こんな鎖…

…」

アツシュは、そう言って魔力を高めようと力を入れる。先ほどは、エリスの邪魔が入って対魔法装置を破壊するには至らなかったが、今度は本気で壊してやろうと集中する。

「仕方がないわね、ランス！」

エリスがそう言うと、視界の外からランスが現れた。肩を落とし、視線を足元

に落とす。そして、手に持った何かをエリスに渡す。

「言う事きかないならこうよ」

「ぎええええええ」

「ッ！」

エリスがそう言うと、アツシユの全身にまるで雷に打たれたかのような電流が走った。その仕打ちに、アツシユはたまらず無様な叫び声を上げ、目にはうつつすらと涙が溜まる。それは一瞬であったが、アツシユの体力をかなり奪い去った。肩で息をしながら、アツシユはエリスを睨みつける。その双眸には、怒りの炎が灯っている。

「あなたの首にはめてあるものはね、ここにあるスイッチを押すと、今みたいな電流が流れる仕掛けになってるの。大人しく言う事をきくことね」

エリスは、アツシユの視線をもともせず言い放つ。ニヤリと笑いながら、再度抵抗するなら、もう一度電流を流す、と言わんばかりに、スイッチを持つ手をアツシユに向ける。

アツシユは、視線を落とすが、首が見えずに舌打ちをする。しかし、言われてみれば、首に異物感がある。

「いやだといったら？」

「仕方ないわね」

「いつでええええええ」

「ッ！」

ためらいもせず、エリスは再度スイッチを押し、アツシユは再度電撃の洗礼を受けた。

そうして、エリスのドSっぷりに負けたアツシユは、フィラ国の助っ人として滞在することになったのである。

孫悟空の緊箍きんこよろしく、自分を痛めつける忌々しい謎の機械を爪でひっかくと、アツシユは、痛かったなあ、と心の中でつぶやいた。ランスは、エリスの言いつけで、アツシユのお目付け役と攻撃の指示を出す役目を仰せつかっていた。城にいる間は、エリス本人がアツシユに纏わりついているのだが、戦艦でのアツシユの監視はランスに一任していた。開戦当初は、エリスも嬉々として戦艦に乗り

込み、ブリッジでやりたい放題していたのだが、流石に困った艦長が国王に泣きつき、「危ない」を理由に、戦艦に乗り込むことを禁じられたのであった。

ランスがこの戦艦に乗り込む時、エリスに例の電流スイッチを渡され、「ガンガン攻撃しなさい」とキツク言われていたが、もともと戦争に賛成ではないランスは、攻撃の指示を出すつもりはなかった。しかし、エリスの言いつけは絶対である。哀れなランスの心の葛藤を、わかって頂きたい。しかし、唯一の反抗手段として、スイッチはアッシュに渡していた。

「……で、どうなされたんですか？」

「お前らが怖がってる隣の国の姫さん……、ルシフェルって言ったか。あいつってどんな奴？ 髪の色とか、瞳の色とかさ」

「髪の色は、栗色ですね。瞳の色は……緑だったと思いますよ」

「ふーん……」

なるほどねえ……。間違いない。俺が仕掛けた霧の中を歩いているのは、ルシフェルって奴だな。迷いもせずにここまで進んでくるとは……。なかなかやるな、お嬢さん。

ルシフェルが懸念した通り、目くらましの術をかけた本人アッシュにはルシフェルが侵入したことは筒抜けであった。

アッシュは、ランスにバレないように、口の端を少しだけ上げて笑う。

「あ、会議室に行けば、ホログラム立体映像があるかもしれません」

「よし、連れていけ」

「ここが会議室です。幸い使用中ではないみたいですよ」
ランスが続いて、アッシュも中に入った。

会議室には、八人掛けと三人掛けの長机で長方形が作られていた。中央の台には、半透明のフィラ国の地図が浮かび上がっている。

奥でゴソゴソと探し物をするランスを横目に、アッシュは霧に意識を集中させていた。

軍服を着て、長剣を腰に差した少女が一人歩いていた。先ほど、ランスに聞いた通りの髪と瞳の色をした少女だ。今は、川沿いに腹ばいになり、双眼鏡でこちらを覗いたりしながら様子を伺っている。ふむ……。ここまで入ってこれるとは……。少し力を見くびっていたようだな。

「ありました！　これがルシフェル皇女です」

そうこうしているうちに、目的の物を見つけたランスがメモリーチップを機械に差し込み、中央の地図をルシフェルへと変えていた。「色は、はっきりと出ませんが……。顔はよくわかりますでしょう」ランスは、アッシュの隣へと回る。

パールミレイ国黒魔法軍の軍服を身に纏い、前方を睨みつけ、肩までの髪を揺らしながら歩いている少女の姿が映し出された。おもむろに、右手を肘の高さまで曲げると、その手のひらが光り出した。双眸に怒りを灯しながら、ルシフェルはゆっくりと歩く。次第に手のひらの光が強くなってくる。

「魔法を使う瞬間を収めました」

「そのようだな」

ルシフェルの唇が、僅かに動く。何の呪文を唱えているのかはわからなかったが、短い呪文であったようだ。すぐに、手のひらの光が球状になり、それを投げるように、ルシフェルは腕を振る。そこで映像は一瞬途切れ、また始めに戻った。

アッシュは、深く巻いたバンダナをはずし、目の前の椅子に座る。そして、一連の映像をしっかりとみることにした。手を口の前で組み、食い入るように映像を見つめる。

「何か気になることでも？」

映像を見たまま動かないアッシュに、ランスは痺れを切らして尋ねた。

「……別に」溜め息混じりにアッシュが答える。

なんだって俺がこんなガキ相手に戦争しなきゃなんねえんだろうなあ。

確かに、魔法使いとしてルシフェルと勝負してみたいという気持ちには、アッシュの中に少なからずあった。しかし、年端もいかぬ子供を相手にするのは抵抗がある。そんなことをぼんやりと考えながら、アッシュは映像に見入っていた。

何も言わず、微動だにせず、食い入る様に映像を見つめているアッシュに、ランスはある疑問を感じ始めていた。しかも、わざわざよく見えるようにバンダナをはずして、だ。すでに、顔を覚えるには十分すぎる回数繰り返し返されている。細かい点に注目するには、荒すぎる映像であったし、意味がないように思われた。

「……十二歳だったな……」アッシュがポツリと呟いた。

「そうですね十二歳です。ロリコンって言われちゃいますよ」
その後、廊下に鈍い音が響いたのは言うまでもない。

「全くあの野郎……」

アッシュは、寝返りをうちながら呟いた。

思いがけずロリコン扱いされ、アッシュは怒りの鉄拳をランスにお見舞いした。それでも気分が晴れずに不貞寝をしたが、横になって考え事をしたまま、すでに夕刻になっていた。ランスは頭を抱え、ブリッジへ行ったまま戻ってこない。アッシュに思いきり殴られたおかげで、僅かなエンジンの振動でも頭痛がすることだろう。自業自得である。

もう一度寝返りをうち、アッシュは頭の後ろで手を組んで天を仰いだ。エンジンの音に混じって、戦闘機の放つ銃声が僅かに聞こえてくる。天井を見つめながら、首の機械に触れる。無機質なそれはアッシュの体温に温められ、少し熱を持っていた。爪でカリカリと側面を搔きながら、接合部分を探る。何度かこの作業を繰り返し返していたアッシュだったが、ガツチリと合わさっている為、結局諦めることになる。

「あ　ツイライラする……」

アッシュは、跳ねるように起き上がりベッドに腰掛けた。

気分を変える為に頬をパンツと一度叩くと、立ち上がり、ドアを開いて部屋の外に出た。

その瞬間、警告ランプが廊下を赤に染めた。窓から入る夕日で、朱に染まっていた廊下を覆い隠す程の真っ赤な色のランプが回りだす。

「総員、衝撃に備えてください！ 敵野営より攻撃を確認！ 総員、衝撃に備えてください！」

アナウンスと同時に機械音が響き、船体が僅かに振動を始める。アツシユは、すぐさま近くの窓から外を見る。眼下に広がる野営から、光が一直線にこちらに向かってくる。その光が、戦艦に当たろうかというほど近づいた時、展開されている無色透明の防御フィールドに当たり、四散する。その衝撃で、船体が激しく揺れた。

「くっ……」

アツシユは、衝撃に片膝をつく。

素早く、自ら張った霧へ意識を集中させる。考え事をしていたせいで、いつの間にかルシフェルはそこらになくなっていた事に気がつかなかった。眼下に広がった野営を、もう一度見る。肉眼ではテントが張ってあることまでしかわからず、人は全く見えなかった。アツシユは意識を集中させ、ピントをどんどん人へ合わせていく。野営付近を隈なく捜す。軍服を着た数人が、こちらに向けて手を伸ばしている。防御壁を展開している者、攻撃を仕掛けている者が並んでいるのが見える。忙しく動き回る若い少年達。白衣を着た女達。

「いた……」アツシユは、思わず呟く。

少し離れた場所から、野営へ走っていく人影が一つ。栗色の髪、緑眼の少女　　ルシフェルであった。息を切らし、全力疾走している。

その時、窓の外が一瞬光に包まれる。アツシユは、眩しさの余り窓から目を離した。その直後、軽く船体が揺れる。

攻撃か！？

第2章 出会いと別れ【3】

ルシフェルは、ようやく目くらましの霧の外に出た。

ごく普通の、なんともない空気がとても心地よく感じる。暑いはずの太陽が今は暖かく、愛しく思え、ルシフェルは深呼吸をした。上空を見上げると、はるか遠くにフィラ国の小型戦闘機が見える。おそらく、どこかで戦闘しているのだろう。

ふと気がつくと、前方に蹲っている人影が見えた。それは、両膝を抱え、ボーツと空を眺めている子供であった。

「お前、こんなところで何をしている」

ルシフェルは、近づきながらその子供に言う。よく見ると、ルシフェルと同じ年ぐらいの少年であった。柔らかい金色の髪に、大きな瞳が印象的な顔をしている。服装は、パールミレイ国の一般的な市民の装いである。軍人ではなく、一般市民の、しかも少年が前線に迷い込んでいるとあっては、保護しなくてはならない。

「ルシフェル様？」

少年は、ゆっくりとルシフェルを見ながら言う。

「なぜ、わかる？」

「この世界で、君を知らない人はいないよ。顔を知らなくても、僕と同じぐらいの年の女の子が軍服を着ているってだけで、ルシフェル様だって判断できるさ」

「……そうか」

ルシフェルは、少年の目の前に立って無表情で見下ろす。しかし、少年はニコニコと笑い返す。

「お前、名は？」

「シエン」

「では、シエン。お前はここで何をしている」

「迷っちゃった」シエンは、やはりニコニコしながら答える。

ルシフェルは、引きつったような顔でシエンを見下ろしている。

終始ニコニコしているシエンに、どう対応していいか分からず、戸惑っているようだった。

「それなら、私が近くの野営まで送っていこう。私がここまで乗ってきたスカイボードは一人乗りでな、少々時間はかかるが歩いて行くぞ」

ルシフェルはそう言って歩き出したが、シエンは座ったままで、立ち上がるうとしなかった。

「何をしている。行かないのか？」

「さつき、転んだ時に足を捻って……、まだ少し痛いんだ」

「手を貸してやる。ここから早く離れたほうがいい」

ルシフェルは、そう言ううと手を伸ばした。その手を掴むと、シエンはゆっくりと立ち上がった。シエンの視線が、ルシフェルと同じ高さになる。背は、同じぐらいのようだ。

「ありがとう」シエンの笑顔は、ひまわりのようだった。

手を繋いだまま、二人はゆっくりと歩き出す。シエンは右足を捻っているらしく、その足が地面に触れるたびに顔をしかめていた。

それと同時に、ルシフェルの手にも体重がかかる。一步一步慎重にゆっくりと歩く。しばらく二人は無言だった。

誰かと一緒に手を繋いで歩くのは、久しぶりだな。

ルシフェルは、幼い頃、国王である父と一緒に歩いた庭を思い出していた。庭師によってよく手入れされた庭には、緑が溢れ、花が咲き、鳥が歌っていた。その庭にある噴水の脇を、ルシフェルは父親と一緒に手を繋いでよく歩いていた。僅か十二年しか歴史がないルシフェルだが、それが遠い昔の様に感じられた。

「ルシフェル様は、僕より二つも年下なのに……」

突然、シエンが口を開いた。

「黒魔法軍の総帥で、力も十分にあつて……、戦いに参加してる。

でもさ、戦うの……本当は嫌じゃないの？」

「なぜ？」ルシフェルは、驚いた顔をしてシエンを見つめる。

「なぜって……。戦争だよ？」

「戦争とは、国を良くするためのことだ。戦うことができ、私はうれしい」

「戦うことが国を良くする？ 本当にそう思ってるの？」

シエンは歩くのをやめ、ジツとルシフェルを見つめる。ルシフェルも、シエンを見つめ返した。

「父上が言っていた。誰にも逆らわせない絶対的な力をもって世界を平定すれば、戦争が起こらなくなると」

「それじゃあ戦争はなくならないよ！ 戦争をなくす為の戦争なんて本末転倒じゃないか！」

「なぜ？戦争をなくすための戦争が、なぜいけないのだ？」

ルシフェルは、真剣な目をシエンに向ける。シエンは眉をひそめ、見つめ返す。言葉が出てこない様子で、口を開いては閉じ、しきりに言葉を探していた。

「キミは、戦争でどれだけの方が犠牲になっているのか、知っているのかい？」

ようやく、シエンは乾いた声を出した。

「報告は受けている」

「その犠牲者に対して、君はどう思っているのさ」

「国の為に死ねるなんて名誉なことだろう」

ルシフェルは、真剣な目でシエンに向かった。

「ふざけるな！！」シエンは、下を向いたまま怒鳴る。

ルシフェルはびっくりして、シエンを眺めた。握っている手に、力がこもった。なぜ怒鳴られたのかわからず、ルシフェルは少し戸惑った。

「バカな事言うなよ……。名誉！？」

シエンは、ハッと蔑むように鼻で笑った。

「君達軍人はそうかもじゃない……。でも、国民は？ 僕の妹も……君と同年だ……。生きていればね！ 二年前の戦争で、爆撃を受けた家の下敷きになって死んだ。父さんも、母さんも！ それも名誉なことなの？ 仮に名誉なことだとしても、何回も何回も戦争を

繰り返して……、僕の父さん母さんと、妹の死は何のためだったの？　なんで繰り返すの？　何のための戦争だったんだよ！！

戦争がいい事なわけないじゃないか。戦争の度に街は壊されて、みんな戦い方もわからずただ死んでいくさけ……。親は子を失い、子は親を失う。兄弟は引き裂かれ、貧困と恐怖で苦しんでる。城下町は賑わっている様に見えるでしょ……。でも、それは見えない部分があるからなんだ！　大して重要でもない理由で戦争を起こして俺達を巻き込んで……。苦しめて……。なのに平和？　笑わせんなよ！　たくさんの人の犠牲で成り立つ平和なんか、僕はいらナイよ！！」

シエンの瞳からは、大粒の涙が溢れていた。家族を戦争によつて失った悲しみは、簡単には癒えない。天涯孤独になり、一人で生きなければならなくなったシエンは、おそらく想像も絶する体験をしてきたのだろう。明るく振舞っていたのは、その裏返しだったのかもしれない。力任せにルシフェルを握っていた手を離し、シエンは服の袖で涙を拭う。

嗚咽を漏らしながらその場にたたずむシエンを見て、ルシフェルは一步後ずさった。

わからない……。シエンは何を言っているの？　なぜ泣いているの？

ルシフェルは、シエンが言ったことを理解できず、ただ、立ち尽くすことしかできなかった。なぜ戦争を否定するのか、なぜ悲しいのか、理解できなかつた。ルシフェルは、その生い立ちに悩むことはあつても、恵まれている。王家の者として生を受け、その魔力で黒魔法軍総帥の地位を勝ち取り、何不自由なく生きていたのだ。家族がいて、部下がいて、温かい城いえもある。天涯孤独となった少年がどんな風に生き抜き、その中で何を考えてきたのか、到底わかるはずもない。根本的な価値観が違う二人が、理解しあえるはずもない。ましてや、ルシフェルは、国王から歪んだ帝王学を教え込まれている。シエンの言葉が届くはずもないのだ。

「そういえば……。グレイも同じことをいつていたな」

ルシフェルの脳裏に、ふとグレイが浮かぶ。

「グレイ？」

「私の部下だ。そういえば、グレイにも何度も同じことを言われた」
「だったら……」

なぜ理解できないのか。という言葉をしエンは飲み込む。

「私には……理解できない」少し寂しげにルシフェルは言う。

「だが、お前の話をもっと聞きたい。聞かせてくれるか？」

微妙な変化ではあるが、ルシフェルの表情が柔らかくなっていった。おそらく、しエンに少し心を許したのだろう。筆舌し難い経験をしたであろうしエンの心の叫びは、ルシフェルの心を揺さぶり、わずかながら届いた。同じ事を言っていたグレイは、おそらく大人すぎた。理解してもらおうと理屈っぽい話になってしまい、ルシフェルの心には届かなかつたのだ。

価値観が違うのなら、お互いに分かり合えば良い。ルシフェルは、それを本能で感じ取っていたのか、しエンの事をもっと知りたいと思っていた。そして、しエンに手を伸ばす。再び、歩く支えとなるために。

しエンは、涙を拭くと、その手を握りしめながらわずかに頷いた。
「ごめん……ちょっと言い過ぎたよ。ルシフェル様は僕たちの為に戦っているのに……」

「私はその為に総帥でいるのだ」

そう言って、ルシフェルは小さく微笑んだ。

ゆっくりと歩を進めながら、ルシフェルはしエンの言葉に耳を傾けていた。今まで、大人社会の中で育ったルシフェルは、同年代の子供と話したことがなかった。入ってくる新入隊員は、ルシフェルの事を恐れ話しかけてこなかったし、ルシフェルも自ら話しかけることはなかった。一番仲のよいグレイは、ルシフェルと七つ離れている。

普通の王族なら、一般市民に、いわゆるタメ口で話されて激怒す

るところであるが、ルシフェルは、今までそんな風に話された事がなかったせいか、逆に新鮮で、すんなりと受け入れる事ができた。何しろ目線の高さが同じことに、ルシフェルは、知らず知らずの間に安心感を持つていた。見上げ、見下ろされることもない、同じ視界を持つ人間に初めて出会ったのだ。

「ルシフェル様は、戦争で部下を失ったりしないの？」

「そりゃ、失うこともある」

「悲しくないの？」

「死ぬのは、そいつが弱いからだ。私は死にたくなかったら強くなれと教育している」

ルシフェルは、訓練の中で何度もこの言葉を部下に言い放っていた。戦争において、自分の力で生死が決まる。弱い者は死に、強い者が生き残る。動物の世界と同じ、弱肉強食の世界が戦場には広がっている。それを、身をもって体験しているルシフェルは、部下に死んでほしくないが為に、そう言い続けていた。

「人は弱いから死ぬんだ……」シエンは、唇を噛む。

「じゃあ、ルシフェル様が軍で一番仲がいいのは誰？」

「信頼に値し、私のよき理解者だと思うのはグレイだな」

「そのグレイって人が死んだら、ルシフェル様はどう思うの？」

「グレイが？副隊長だぞ？ 私の右腕だ。死ぬわけがない」

「例え話だよ。ねえ、グレイ副総帥が死んじゃったら悲しい？」

「うーん……」

グレイが死ぬ……。私の片腕がいなくなる……。もう、私を理解してくれる隊員がいなくなる。思えば、私を気にかけてくれたのはグレイだけだった。昔も今も変わらず、私に接してくれていたのはグレイだけだ。そのグレイがいなくなる。戦争で……。死ぬ。だからあれほど訓練を怠るなどといったのに。死ぬなんて、情けない。だが、戦争で死ぬことは名誉なことだ。国を良くする為に働いた。名誉なことだ。でも、グレイはもういない。少し、寂しいな。

「少し、寂しい」

ルシフェルは、小さな声で呟いた。

「その寂しいって思いが分かるなら、僕が言っている意味、少しはわからないかな」

シエンは、ルシフェルの顔を覗き込んで言う。

「でも、やっぱりグレイが死んだのは、グレイの弱さだ」

溜め息をついて、シエンは空を仰いだ。

「とにかく、寂しいって気持ちがあるならさ、その寂しいって気持ち、僕にもあるのはわかるよね？」

シエンは、自分の妹を諭すような優しい声で言う。

「僕の家族は、軍人じゃなくて、力を持たない一般市民だ。その一般市民が戦争に巻き込まれて死ぬことは、名誉なことなの？」

「誰も死ぬことがないよう、絶対的な力をもって世界を平定させ、戦争をなくす。そうすれば、誰も寂しい思いをしない」

ルシフェルは、どうだ！ と、言わんばかりに真剣な顔でそう答えた。全くもって、自分の言ったことは正解だったと、確信したように満足気な顔をしている。

「堂々巡りだよ！」

シエンは、会話を放棄した。

口をとがらせ、怒ったような顔をしている。

「すまない……」

ルシフェルは、少し困惑したように眉をひそめた。

「いいの、いいの。いっぱい話してルシフェル様にわかってもらえるように、僕がんばるよ」

シエンは、ウィンクしながらガッツポーズをした。そのしぐさに、ルシフェルは口元を緩める。

「ルシフェル様、もっと笑えばいいのに」

「え？」

「今、笑おうとしてなかった？ もっととはっきり笑わないと！」

「いや、私は……」

「僕には笑った顔見せてくれないの？」

シエンは、一瞬にして泣きそうな顔になる。それを見て、ルシフェルは、たじろぐ。先ほどのように、また泣き出すのではないかと身構えた。

「そ、そういうわけでは……」

「じゃあ、なんで笑ってくれないの？」

シエンは、困惑しているルシフェルを覗き込みながら言った。ルシフェルは、シエンを見つめながら頬に手を添える。

「……私は笑っていないのか？」

「え？」

「久しく笑っていないからな。どう笑うのか忘れたのかもしれないな」

そう言っただけでシエンを見るルシフェルの顔は、無表情だった。

「なんで！ どうして？」

シエンは、少し大げさなぐらい体をそらして驚きを表現した。ルシフェルは、そのシエンに驚き、ほんの少し目を見開いた。

「私は、総帥だ。上に立つものとして、威厳を示さねばならない。

怒ることはあっても、笑うことなどない。……それに、私は、常に冷静でいるように教育された。もし、いらぬ感情に流されて間違った決断をしたら……、何百という隊員、何千万というパールミレイの国民、そして、パールミレイが治めている他の国の何億という民の命が危険になる」

シエンは、そう言い切るルシフェルをただ見つめる事しかできず、黙って聞いていた。たくさんの重い命を、その双肩に担ったルシフェルの瞳は、凜としていた。十二歳の子供がするには、大人びている表情に、シエンは意を決し、捻っていない方の足を軸に体を回転させ、ルシフェルの正面に回る。そして、両手をギュッと握り締めた。

「じゃあ、僕がルシフェル様の友達になる！」

「え？」

「友達になら、威厳も何も示さなくてもいいじゃん！ だから、ね

？ 一緒に笑おうよ」

そう言って、シエンは破顔した。白い歯を、これでもかという程ルシフェルに見せながら、シエンは首を傾げた。

「と……、友達？」

「せっかく綺麗な顔してるのに、笑わなきゃ損だよ、ね？」

そう言つと、シエンは握っていた両手を離し、おもむるにルシフェルの口元をおもいつきり掴んでひっぱった。そして、上に無理矢理上げる。

「ヒエ……ヒエン」

口をひっぱられているおかげで、ルシフェルはうまく「シエン」と発音できず、無様な音を紡ぎだした。

「あははははは、ごめんルシフェル様」

シエンは、腹を抱えて笑い出した。仏頂面の口元を無理矢理持ち上げて、笑顔には見えない。その妙なルシフェルの顔に、自分でおきながら、笑い出してしまった。

「……」

ルシフェルは、シエンの笑っている姿をジッと見る。垂れた目じり、あがった口角、開かれた大きな口、本当に、心からおかしいといった様子で、楽しそうに笑っているシエンに、ルシフェルは知らぬうちに口元を綻ばせた。

「なるほど、楽しいな」

弾むような気持ちだが、心の底から沸いてくる。ルシフェルは、久しく感じたことがなかった感情に、なんだかむずがゆくなる。しかし、それが心地いい。

「シエン、城へこないか？」

「え？」

ルシフェルの突然の言葉に、シエンは動きを止める。笑っていた顔が、一瞬にして真剣な面持ちになり、言葉を失った。脳が反応しにくれず、意味を理解することが出来なかった。ルシフェルは、シエンが動きを止めた事で、自分が何か良くないことを言ったのでは

ないかと不安になる。

「シエンを友人として城へ招きたい。ダメか？」

焦るように、ルシフェルはシエンの両肩に手を添える。

「私は、何か気に触るような事でも言ったのだろうか」

ルシフェルは、何も反応しないシエンの体を揺さぶる。すると、

シエンの定まっていなかった焦点が定まり、ルシフェルを見つめ返した。そして、満面の笑みを浮かべてルシフェルに抱きついた。

「ダメじゃない！ 全然ダメじゃない！ 僕、すごくうれしいよ！」

シエンは、目にうつつすら涙をためながらそう言った。

「私も、友達ができてうれしい」

ルシフェルは、『友達』という発音に少し頬が赤くなる。産まれて初めて誰かの事をそう呼んだせいで、照れてしまったのだ。

「ありがとう、ルシフェル様」

瞳にたまった涙は、シエンの頬を流れ落ちる。そして、シエンはルシフェルから離れ、涙を拭った。

「さあ、日が落ちる前に急ごう」

ルシフェルは、そう言ってシエンに手を差し伸べた。

日が傾き始めた頃、二人は、雑木林を抜けた先にある野営に到着した。

「お疲れ様です！ 総帥！」

遠くから歩いてくるルシフェルを発見した隊員が連絡したらしく、近くに着くころには第六部隊長のジョニーが出迎えていた。

「ご苦労。国境付近に一般市民が迷い込んでいた。保護したが、足に怪我をしている。治療してやってくれ」

ルシフェルがそういうと、ジョニーは敬礼しシエンを軽々と持ち上げて救護テントへ走っていった。ルシフェルも、それを追ってゆつくりと歩いていく。

近くにあった救護テントに運ばれたシエンは、すぐに治癒魔法で捻挫を治してもらい、ぴよんぴよん飛び回っていた。

上空にはフィラ国の戦闘機が飛び回っている。強力な防御壁が展開されている為、野営にその攻撃は届いていなかったが、ミサイルがそれに当る音がうるさかった。戦闘機に対抗して、第六部隊の何人かが飛び回って迎撃し、数多くの部隊員が地上からそれをサポートしていた。

その中を、シエンが駆け寄ってくる。ミサイルの音に肩を竦めて何度か立ち止まりながら、ようやくルシフェルの前に辿りついた。

「ありがとう！ ルシフェル様。ほら、もう痛くない！」

右足を軸にして、シエンはくるくると回った。

「よかったな」

ルシフェルは、表情を全く変えずに言った。シエンは、それにニコニコと笑いながら答える。

「もう日が暮れかけている。フィラ国の戦闘機も、もう撤退するだろう。今日はこの野営に泊まれ。明日城まで連れて行く」

「わかった！」

「そういうわけだ。よろしく頼む。ジョニー隊長」

「りよ、了解しました。しかし総帥、この子の家ではなく城に連れていくんですか？」

ジョニーは、驚いた表情でルシフェルを見つめる。

「シエンは城に連れていく。私の友人として、城に住んでもらう」

ジョニーは、立ったまま失神しそうになった。ルシフェルの口から、友人という言葉が出てくる日が来るとは夢にも思わず、一瞬間き間違えたかと耳をほじる。しかし、ニコニコしながらルシフェルに顔を向けるシエンと、それに対して無表情ではあるが、うなずきながらシエンの顔を眺めているルシフェルを見て、理解した。

そうか、総帥は同年代の子が周りにいないのか。

「わかりました。第六部隊が責任をもってお預かり致します！」ジョニーは、自分に任せると言わんばかりにドンと胸を叩きながら言う。

「うむ。私はもうしばらくこの辺りをまわって、日が落ちたら戻っ

てくる。シエンを頼む」

「了解！」

ジョニーは敬礼し、シエンはニコニコしながら歩き出すルシフェルに手を振った。

ルシフェルは、それに対してやはり無表情な顔を向け、軽く右手を上げて答えた。

しかしルシフェルは、後にこれを後悔することになる。

ルシフェルが野営を離れて数分後、上空にフィラ国の戦艦が見えた。小型戦闘機は、野営への攻撃をやめ、その戦艦の周りをぐるぐる回っている。

夕日によって朱色に染められた巨体が、雲の合間からその姿を覗かせていた。鉄がむき出しになった戦艦が、ルシフェルは大嫌いだった。それが朱色に染まり、ますます嫌な感じがする。

「シエン……！」

ルシフェルは、踵を返して野営へと走る。

その瞬間、野営の方から光が上空の戦艦へと伸びる。ジョニーの命令で、攻撃が開始されたのだろう。フィラ国の戦艦は、その程度の攻撃ではビクともしないことは皆わかっていた。威嚇の為だったのか、ルシフェルがいる手前、戦艦に一矢報いてやろうと思ったのか、ジョニーは攻撃の命令を下したのだ。

やめて……、シエンがいるのに！

ルシフェルは、息を切らして走りながらシエンの事を考える。

「シエンを巻き込むのはやめてくれ！」無意識のうちに、ルシフェルはそう叫んでいた。

そして、ハッと立ち止まる。

「巻き込む……、戦争に……」

自分が今考えたことは、ついさっきシエンが言っていたことではないか。ルシフェルは、頭が混乱した。しかし、今はそれを考えている暇はない。すぐに走りだす。

頼む。間に合ってくれ……ッ！

戦艦の方へ目を向けると、こちらの攻撃が戦艦のすぐ近くで四散しているのが見えた。魔法に対する防御フィールドが張られているようで、やはり攻撃は通じなかった。ルシフェルは、嫌な予感を振り払って戦艦を見ながら走り続ける。すると、戦艦の下部にある突起が、突然ブウウンと音を立て、周囲の光りを集めながら輝きはじめた。

フィラ国自慢の戦艦の強さは、その攻撃にある。余程の使い手でないで、防御しきれない程の光のエネルギーを一気に放出する攻撃。地上をめぐり、そのすべてを蒸発させてしまう科学の力。フィラ国がこれを開発してからは、少々手強くなっていた。その攻撃と同等の力を放つことのできる魔法は、高度で、誰もが使えるものではない。禁じられた古代魔法のひとつにそれがあつたが、使うことができるのは、唯一ルシフェルだけだった。

レーザー砲……！！

ルシフェルがそれを予感した瞬間、戦艦から光の柱がものすごいスピードで降りてきていた。

もうすぐそこに野営が見えるのに……。嫌だ……。嫌だ……。嫌だ……

……！！！！

「嫌だあああああああ

ッ！！

……！！！！」

ルシフェルは、叫びながら両手をレーザー砲に向け、持てる魔力の全てをぶつけていた。爆発した魔力によって足元から風が起こり、砂塵が舞い上げられる。焦燥感が魔力に変わる。心の叫びに呼応するように、魔力がさらに沸き起こってくる。それと同時に、心の底に沈めていた感情が鎌首をもたげる。

そしてその瞬間、同じ力を感じた。同じ意志。レーザー砲を曲げようとする魔力。

ルシフェルは、意識の中で黒い髪の男を見た。

一体、何が起こったんだ……！？

ルシフェルは、自分の身に何が起きたのか理解できなかった。爆音と共に、ぐるりと空が見えた。今は、目の前に土がある。爆風が自分の頭上を通り過ぎていく。自分の体が吹き飛ばされたことも分からない程、一瞬の出来事であった。自分が、どれ程の力を解放したのかもわからない。だが、体全身を覆う疲労感に、魔力をほとんど使いきってしまったことがわかる。

「……ッ！」

ハツとして起き上がり、風に逆らって立ち上がるうとしたが、体に激痛が走る。力を入れようとした右足と、支えようとした右手がひどく痛む。どうやら、爆風に吹き飛ばされた時に体の右側面を地面に打ち付けたらしい。レーザー砲を曲げるのに精一杯で、障壁の強度をあげることすらできなかつたようだ。僅かに張ってあつた障壁のお陰で、この程度のケガですんだのだろう。痛む体に鞭打って立ち上がった。

そして、眼前に広がる光景にルシフェルは愕然とした。

爆心地からふわりと流れてくる風が、砂塵をルシフェルの足元に纏わりつかせる。そこには障害物など何もなくなつていた。僅かに中心がズレたおかげで、野営から少し離れた場所の地面がかなりえぐられている。しかし、その爆風のせいでも、つい先ほどまであつた雑木林も、野営のテントも跡形も無くなつていたのであつた。ただ、あるのは木材の燃えカス、そして人……。

「シエン……！」

そのうちの一人の姿を見て、ルシフェルは走り出そうと、一歩踏み出した。しかし、右足に激痛が走り、体が崩れ落ちる。疲労感も手伝って、体が思うように動かない。しかし、すぐに起き上がり、痛む体を引きずって、ようやく一人の少年の元へと辿り着く。震えながら、その体をそつと起き上がらせ、抱き締めた。

「……シエン……！」

柔らかな髪感触が、ルシフェルの手に伝わる。しかし、それ以

外にも伝わる感触が一つ。おそろおそろ、ルシフェルは自分の左手をシエンの後頭部から離す。ゆっくりと見えたその左手は、ワインをこぼした時の白いテーブルクロスのように赤い。生暖かいそれは、ルシフェルの左手から滴り落ちて地面をも赤く染めていた。

「血……」

ルシフェルは、ようやく乾いた喉から掠れた声を絞り出した。

そして、ルシフェルは理解した。

抱き上げた時に感じた重さ、それは力がはいっていない四肢であった。手を握っても、握り返してくることもない。爆風で傷ついた顔、腕、足。そして、後頭部から流れ落ちる鮮血。

「シエン……そんな……まさか……」

ルシフェルは、呆然とシエンの顔を眺める。僅かに開いた瞼から光のない瞳が見えた。顔の至るところには擦り傷があり、口の端が切れ、そこから赤い筋が見える。さらに抱き起こそうと力が入れるが、その重みに右腕に激痛が走る。その重みが、シエンの命の重さだとルシフェルは理解する。

ああ、グレイが言っていたのは……シエンが言っていたことは、このことだったのか……。犠牲とは……、力を持たない者達を……守るとは……なんだ？ 私は、シエンに何ができた？ シエンを死なせたのは私の傲慢だ……。

ルシフェルは、その双眸に涙を溜めてシエンを眺める。あふれ出た涙は、頬を伝わり、シエンの顔へと落ちる。

戻らないと……せめて……シエンを綺麗に……してあげないと。だがその前に……。

「おのれ……おのれおのれおのれおのれおのれ

ッ！！

！……！

一瞬にして、ルシフェルはその瞳に怒りを宿し、上空に浮かぶ戦艦を睨みつける。シエンを失った心の空洞は、ルシフェルを意識外へと向かわせた。ようするに、怒りでプツンしてしまったのだ。こうなつては、冷静ではいられず、感情の暴走を止めることはでき

ない。体の痛みも疲労感も、今のルシフェルには全く感じない。シエンを丁寧に寝かせると、獣のように咆哮する。その声に呼び起こされたように、限りなく空に近かったはずの魔力が、意識の底から沸きあがってくる。両手を戦艦に向け、短く詠唱する。いくつもの光の玉が、戦艦に向けて飛んでいった。

光の玉は、戦艦に当たる寸前で防御フィールドに衝突し、四散した。そして、戦艦の周りを飛んでいた何機もの小型戦闘機がルシフェルの方へ向かってくる。

相当な怒りのオーラが、ルシフェルの全身から、陽炎のようにゆらゆらと噴出していた。そして、可視になるほどの強大な魔力が、その体を包んでいる。上空の戦艦からも確認できるほどのそれは、戦艦の中の人間を恐怖させた。

「お前達は絶対に許さない!!!」

ルシフェルはそう言つと、素早く何種類もの印を結び、詠唱を始めた。

「消えろオオオオオオ!!!」

そう言つて、ルシフェルが天へ腕を伸ばすと、夕日が反射した朱色の雲のかわりに、暗雲が一瞬にして立ち込め、飛び回る全ての戦闘機へ、その雲から紫色の雷が落ちた。機体に纏わりついたそれは、バチバチと静電気に似た大きな音を立て、戦闘機を食っていた。紫色の雷の正体は、電気を纏った龍であった。電気系統を破壊された戦闘機は、なす術もなくその龍の胃を満たす。

龍の食事が終わるのを待たず、ルシフェルは次の呪文の詠唱にはいる。詠唱の途中、たまらず嗚咽が混じった。だが、集中力は欠けない。複雑な図形をその両手で空中に描いていき、ルシフェルの目の前に、何重にも描かれた巨大な円が出来上がった。一番外側には奇妙な紋章が描かれ、右に回っている円。しかし、その内側の円は左に回っている。全ての円に統一性がない、不思議な図形がそこにあった。その中心に、ルシフェルは手のひらを置く。

レーザー砲と同等の力を解き放つ、古の叡智《裁きの光》の呪文

をルシフェルは詠唱していた

「さようなら」

ルシフェルがそう言うと、フィラ国のレーザー砲に似た光の柱が、そこから伸びた。

ぐんぐんと伸びていくその柱が、戦艦を捕らえようとした瞬間、見えない壁に阻まれる。重い衝撃がルシフェルの腕に伝わり、肩が外れそうになる。足に力を込めて、それに負けないようにもう一度腕に力を込める。それと同じく、光の柱が伸びたり縮んだりする。まるで、何かと魔力比べをしているようだ。

「バカな！ フィラの防御フィールド程度ならこの呪文で……まさか……、あの男……！」

意識の中で見た黒髪の男が、ルシフェルの脳裏をよぎる。それがフィラ国の助っ人だと、ルシフェルは確信していた。それなら、自分の魔法が防御されたのも納得がいく。

「くそっ！」

ルシフェルは、手のひらを力一杯その凶形に押し付ける。すると伸びていた光の柱は力の均衡を壊すかの様にグングンと進む。しかし、突然ぐにやりと空間が歪み、光は緩やかに曲がった。僅かに軌道がずれ、戦艦をかすめて朱色に染まる空へと消えていった。と、同時にそこにあつたはずの戦艦も、黒煙を残して忽然と消えていた。

「なっ……！！」

目くらましの術か……！

国境付近に張ってあつた術と同じものを戦艦に展開したらしく、戦艦は空に溶けていた。しかも、敵ながら天晴れと言わざるを得ないぐらいのタイミングで。

チツと軽く舌打ちすると、ルシフェルはシエンの方へ向き直った。その踵を返す動作に、体がついていかず、その場に膝から崩れ落ちる。魔力が底をついた時に感じる疲労感以上に、体がダルい。まるで、何人も自分の上にのしかかっているような重さだ。その重みは、死んでいった第六部隊の隊員達か、あるいは、今まで自分が殺した

敵国の兵士達が……。ルシフェルは、頭を振ってその考えを払いのける。

痛みと倦怠感を振り切るように、歯を食いしばりながら立ち上がると、ルシフェルは震える両手で頬を打った。

城に帰るまではもってくれよ……。

ルシフェルは、シエンを抱き上げると、城へと向かった。

第2章 出会いと別れ【4】

なんだ今の感覚は……。目が……。合ったのか？

レーザー砲を曲げようとした魔力が共鳴したのか、ほんの一瞬だったが、二人は視線を交わした。真つ白な精神世界でルシフェルと対峙したアツシユは、そこで妙な感覚に襲われる。しかし、刹那の出来事に、それを確かめる事なく現実へと戻ってきた。視界が光に包まれ、レーザー砲は地上へと到達した。

こっちの攻撃はうまく反れた。しかし、これでは……。

戦艦の真下に広がっていた雑木林とテントの群れは跡形もなく、その少し離れた場所の地面が、隕石が落ちたようにクレータ状にえぐられていた。爆風で吹き飛ばされたテントの残骸が周りに散らばり、そこにいたであろう人が、無残な姿で倒れているが見える。爆風に吹き飛ばされたり、熱風に煽られた者がそこにはいた。アツシユは、耐え切れずに目を逸らした。その視界の端に、動く人影が見えた。それは、傷つき、体を引きずるルシフェルであった。

あれだけの熱量の攻撃を曲げるために魔力を集中させたんじゃない……。自分を守る障壁がもろくなっても当たり前か。それにしても、至近距離でよく生きていたもんだ。

アツシユは、ルシフェルの魔力の高さに改めて感心した。頭の回転も速い。これで十二歳という年齢だから驚きである。

ふと窓の外を見ると、ルシフェルが倒れた少年に駆け寄っていた。刹那であったが、意識がシンクロしたせいで、アツシユに、ルシフェルの深い悲しみが伝わってきた。そして、強い怒りも……。

アツシユは、事態を飲み込んだ。すぐに踵を返し、ブリッジを指した。

扉の前に自分が立ってから、ワントンポ遅れてプシュっという空気音と共に扉が開く。そのタイムラグにすら、アツシユは苛立ちを

覚えた。今は一瞬一秒が惜しい。

モニタの前に立っていたランスを見つけ、肩を思い切り掴んでこちらを向かせる。

「すぐに戦線離脱しろ！ 死にたくなければこの場から逃げるんだ！」

「な、何いつてるんですか？」

「真下にルシフェルがいる。アイツは俺らを殺す気だ。早く逃げろ！」

アツシュは、振り返って艦長へ向けて怒鳴った。その勢いに、艦長は一瞬たじろいだが、すぐに元の威厳を取り戻した。首輪をつけられた助っ人に口出しされ、怒りを露にする。

「撤退はない！ 残るはルシフェルたった一人だ！ 手負いの今がつぶすチャンスなのだ！」

「アホか！ これを見る！ 見えねえのかあれが！ お前等にも今ならあの魔力が見えるだろう！」

アツシュは、モニタに映し出されたルシフェルを指差す。魔力を持たない者にも、湯気のようにルシフェルの体から湧き上がる魔力が見えた。魂の叫びが、その強大な魔力を可視にしている。ブリッジにいた全ての人間は、息を呑む。

「フィールドを展開しろ！」

アツシュは、固まって動かない全員に見かねて指示を出す。

その場の全員がハツとして我に返り、それぞれの作業を始める。聞き覚えのある警告音が響き渡り、少し焦ったようなオペレータの声が、スピーカーから聞こえてくる。

防御フィールドの展開はギリギリ間に合ったが、いくつもの光の玉が当たるせいで、戦艦は大きく揺れた。見かけは小さな玉だが、練り込まれた魔力は尋常ではなかったようだ。

船体の揺れがおさまると同時に、戦闘機がルシフェルへと向かっていく。

「馬鹿野郎！ 撤退だ！！」

近くにいたオペレータのマイクをぶん取り、アッシュは思いつきり叫んだ。

「くそっ！ フィールドを展開しつつ後退だ！ 早くしろ！」

「勝手に命令を出すな！」

「うるせえ！ 戦線離脱だ！ 死にたくなかったら必死にやれ！」
艦長の声を無視し、アッシュは叫ぶ。先ほどのルシフェルの姿で、すでに戦意を喪失していたブリッジの全員は、アッシュの命令に従う。すぐに、戦艦は後退しつつ、進行方向の向きを変え始める。

「きゃっ！」

短い悲鳴と共に、オペレータの女がモニタから目を逸らす。見ると、そこには紫色の龍に絡まれた戦闘機が映っている。戦闘機が食われている姿を映し出しているモニタの横に、ルシフェルが映っているモニタがあった。ルシフェルは、また何か詠唱を始めているようで、小さく口を動かしながら両手で複雑な印を結んでいる。

「な……、裁きの光……！」

アッシュは、ルシフェルが唱えている魔法が何なのかすぐに理解し、驚愕した。

複雑な呪文と複雑な図形、高い魔力と高い集中力、十二歳の少女が使う呪文にしては高度すぎるものを、ルシフェルは唱えていたのだ。レーザー砲に相当する熱量と威力が、その古代魔法にはあった。絡み合う図形が、周りの分子を分解して再構築し強大な魔力へと変化していく。魔力が渦巻き、ルシフェルへと流れ込む。それを手のひらから中央の複雑な図式が組み込まれた図形へと流し込み、さらに熱量に変化させる。

あれを受け止めるには、真っ向から勝負しないと無理だ。

「ランス、ここはお前に任せる。俺はあれを食い止める！ 多少戦艦にダメージがあるかもしれないが、国に帰るぐらいはもつ。悪いがお前達に協力するのもここまでだ！ じゃあな！」

アッシュは、そう言うつとブリッジを出た。

「首の機械……、ついたままなのに……」

アツシユの消えた扉を眺めつつ、ランスはポツリと呟いた。

アツシユが戦艦の搬入口に到達した時、ルシフェルの描いた図形から裁きの光が、今にも発射されようとしていた。重たい搬入口を開けると、風が勢いよく入ってきた。風圧に押されながら、アツシユは詠唱をしつつ、何の躊躇いもせずそこから朱に染まった空へと飛び降りた。

風に流されながらも宙に浮くと、軽く膝を曲げ、そこに見えない地面でもあるかのように空気を蹴り上げた。眼下に見えるルシフェルを望みながら、アツシユは戦艦の頂点へと跳んだ。

飛ばされそうになりながら、アツシユはできるだけ早口で詠唱をする。すでに放たれた光りの柱は、どんどん戦艦に近づいている。

「させるか！」

詠唱を終わらせ、寸でのところで防御壁を形成する。ルシフェルがしたように、アツシユも周りの分子の再構成で魔力を分散させていた。力の押し合いが始まり、押され押しつつの膠着状態が続く。アツシユは、額に汗をにじませていた。踏ん張っている足が、わずかに押される。歯を食いしばり、風に飛ばされそうになるのをこらえ、さらにはルシフェルの魔力に負けないように防御壁を展開させている。

ルシフェルの魔力は、すでに限界だろうと予想していたアツシユは少々焦った。どうにも力の均衡は破れない。埒が明かないと悟ったアツシユは、すぐに防御壁の属性を変化させるべく、図形の一部を描き直す。分散から屈折へ……。役目を変えた図形は、すぐに空間をぐにやりと曲げ、ルシフェルの魔力を歪ませる。《裁きの光》の軌道が、僅かにずれた。だが、曲がりきらずに、戦艦をかすめて空へ伸びる。

「さて、今のうちに」

ルシフェルとの魔力合戦から開放されたアツシユは、戦艦全体に目くらましの術をかける。国境のそれと同じ術だが、今度は霧では

なく背景と同化させていた。おそらく、ルシフェルからは、戦艦が消えて見えたことだろう。黒煙も手伝って、一瞬、ルシフェルの視界から戦艦が消えたはずである。そのタイミングを見計らって、アツシユは術を行使したのだ。

下を見ると、ルシフェルは膝をついてその場に倒れている。

さすがに魔力の限界か……。

アツシユは、深く長い息を吐いた。

「さて、俺はこのまま失礼するぜ。じゃあな、ランス。我がままなお姫さまと仲良くな」

アツシユは、黒煙を上げてフィラへと向かう戦艦から勢い良く飛び降りた。しかし、すぐに首の違和感を感じ、青くなる。

「首

ッ！」

声にならない声を発し、アツシユは落ちていった。

第2章 出会いと別れ【5】

その日の深夜、ようやく黒魔法軍本部に着いたルシフェルは、シエンを抱きかかえたまま、廊下を歩いていった。半ば意識を失いかけており、ケガした部分の痛みは麻痺していた。気力のみでなんとか動いている状態である。

「総帥!? こんな時間に何してるんですか?」

ふと、目の前で声がしたので、ルシフェルは立ち止まった。顔をあげると、ちょうど扉から出てきた 그레이 がこちらを見ている。

「そ……総帥……」

グレイは、ルシフェルの姿に息を呑む。血まみれの少年を抱きかかえたルシフェルの姿が、月明かりに照らされた。抱きかかえられた少年は、全身が砂にまみれ、自らの血で衣服を真っ赤に染めている。ルシフェルの胸に寄りかかっている顔には、全く生気がなく、すでに事切れているのがわった。ルシフェルの軍服は少年の血と砂で汚れ、所々裂けている。グレイを見上げた顔は、魔力がつかたように蒼白で、意識が朦朧としているせいか、瞳にも光りがなかった。

「総帥……一体……」

グレイは、今まで見たこともない、憔悴しきったルシフェルの姿に泣きそうになりながら問いかける。

「……グレイ……お前が言っていた意味が分かった様な気がするよ……大切なものを……無くして気づくなんて……。私は……愚かだった」

力なくそう言うと、ルシフェルはグレイの脇を通り過ぎていった。俺の言っていた意味……?」

「総帥!」グレイは、ルシフェルを追いかけながら叫んだ。

「救護室に行きましょう、その少年は私が運びます」

立ち止まり、下を向いたままルシフェルは答えなかった。グレイがシエンを抱き上げようとした時も、抵抗せずに受け渡した。シエ

ンの重みから解放された両腕は、力なくダラリと垂れ下がる。その感覚に、ルシフェルは激しい喪失感に襲われる。シエンのおかげでなんとか保っていた意識が、次第に薄れていく。視界の幅が極端に狭くなり、目の前がよく見えなくなってきた。

「？」

グレイは、ポスンという音と共に自分の背中に何かが当る感触がし、何事かと後ろを振り返る。すると、そこにはルシフェルの頭があった。

「総帥？」

グレイが振り返ると、ルシフェルは音もなく廊下に崩れ落ちた。シエンを抱きかかえていたせいで、グレイは手が出せず、ただそれを見ているしかできなかった。グレイは、とりあえず、近くの自室へとシエンを運び、ソファに寝かせる。

「後で迎えにきますからね」

そう言って、グレイはルシフェルをまず救護室へと連れて行った。

耳に心地よい水の音の中、ルシフェルは意識を取り戻した。目を開けると、白い天井が見える。視界に動くものが見え、目だけでそちらの方を向く。すると、洗面器に張った水で、タオルを洗うグレイの姿が見えた。水の音の正体は、それだったようだ。どうやら、自分は救護室のベッドの上に寝ているようである。

「グレイ……」

ルシフェルがそう言うと、グレイは飛び跳ねるようにこちらを向いた。

「総帥！ よかった……気がついたんですね」グレイは、破顔しながら言った。

「私は気を失ったのか……」

ルシフェルは、グレイに問いかけるわけでもなく、独り言を言った。

「総帥、とりあえずこれを飲んでください」

グレイは、少し微笑んで青い液体のはいつた透明の小瓶を差し出す。魔力回復の薬だ。ルシフェルは、ふたをあけて容器を傾ける。青い液体は、キラキラと輝きながらルシフェルの喉を潤し、失った魔力をわずかに蘇らせる。ほんのりと、ルシフェルの頬に赤みが戻る。

グレイは、シェンを濡れタオルで拭きつつ、ルシフェルの様子を横目で見ていた。まさかと思って魔力回復薬を飲ませたが、本当に魔力が底をついていたとは思ってもみなかったグレイは、面喰らった。

ルシフェルは、軽く溜め息をつきながら、グレイの方へ足をおろしてベッドに座る。

「看護師は？」

「部屋に戻してあります。人払いした方がいいかと思いましたが……」
「いい判断だ。助かった」

ルシフェルは、そう言つてジャケットを脱いだ。グレイは、ハッと息を呑んだ。ルシフェルの右腕が、紫に腫れ上がっていたのだ。

「そ……総帥！ その腕は」

「ああ……、レーザー砲の爆風でな……」

右腕にそつと触れながら、ルシフェルは苦虫を噛み潰したような顔をして言った。

「レーザー砲つて……、まさか、第六部隊のところにいらっしやっ
たんですか？」

「そうか、もう第六部隊の事は伝わっているのだな」

グレイは、慌てて戸棚へと走っていた。薬と包帯を見つけると、すぐにルシフェルのところへ戻ってくる。

「はい、日が落ちてしばらくしてから伝令が届きました。レーザー
砲が落とされたので、様子を見に行った第三部隊から、全滅だと……

……。総帥が近くにいたなんて……」

「国境付近から第六部隊の野営に行つたんだ。その後は、他の野営
に寄らずにここに戻つたからすれ違わなかつたんだろっ」

ルシフェルは、人目を避けるようなルートで城まで帰って来た。最短距離をいった早馬とは、鉢合わせなくて当然である。

「とりあえず、応急処置ですみません」

グレイはそう言うと、手際よく薬を塗って包帯を巻く。

「こんな腕で、この少年を抱えていたんですか？」

「感覚は麻痺していた。それに、シエンの痛みはこんなものではなかったはずだ」

ルシフェルは、ベッドに横たわるシエンの顔を見る。その瞳は憂いを纏い、愛しい人でも見るように優しくかった。しかし、すぐにそれは悲しみに変わる。深い悲しみが、その瞳をうつすらと濡らす。

グレイは、驚嘆する。その瞬間のルシフェルは、総帥の顔ではなかった。それは、五歳の頃の、あの懐かしいルシフェルのようにみえた。彼女が、他人に対して感情を持って接するのを見るのは、七年ぶりである。例え、それが悲しみであったとしても、グレイは少しうれしかった。

ルシフェルは、グレイが持っていた濡れタオルを掴む。シエンの体の、土で汚れた部分を綺麗にタオルで拭き、丁寧に丁寧に、ルシフェルはシエンを綺麗にしていく。自分にできることは、こんなことしかないんだと、ルシフェルは嘆いていた。その姿を見たグレイは、もう一つの濡れタオルで、シエンを綺麗に拭き始めた。

「いくら強くても……魔法の数も、障壁の強さも、何の意味もない。シエンを守れず、傷ついた友人を癒すこともできない」

「総帥……」

「私は、シエンを友人としてこの城に迎えようと思っていたんだ……」

「見たところ、総帥と同じぐらいですね」

「グレイ、お前は……、私が入隊してから本当によく面倒を見てくれた。この軍の中で、唯一お前は信頼に値する。七つ年は離れていくが、お前は訓練の苦楽を共にした仲間だった」

ルシフェルの突然の告白に、グレイは不覚にも涙が出そうになっ

た。まさか、自分がそんな風に思われていたとは、露ほど思っていないかったのだ。ルシフェルにとって、自分はただの部下でしかないと思っていた。しかし、自分のことを信頼してくれていただけで、グレイの目頭は熱くなる。

「だが、お前と私は対等の立場ではなかった……。シエンは、私と同じ目線だった。敬語で話すこともなかった。ニコニコと常に笑っていた。……ここにはそんな世界がないから、時間がある時は、シエンと一緒にいようと思ったんだ。シエンは、グレイがよく言っていたことと同じことを私に言ってきた。戦争のことだ。やはり、理解はできなかった……。でも……。すまない、シエン……。お前の言ったこと、お前が死んでやっとな理解できたような気がする……。」

ルシフェルは、下を向いて肩を震わせながら言った。グレイの手前、泣くまいと必死にこらえているのだろう。つんと鼻の奥が痛み、涙腺が、その瞳を潤そうとしている。歯を食いしばり、ルシフェルはなんとかそれを押し込める。

「そう思えたなら、それを大事にしていけばいいのではないですか？」

グレイは、ルシフェルの顔を覗き込みながら言った。うつすらと潤んだ瞳が見え、グレイは軽く微笑む。

「今まで培ってきたものを壊すというのは、大変なエネルギーがあります。すぐに全てを理解しようとしても、無理でしょう。教えられたりして得た知識は、案外脆いものなんです。自分で考え、経験した知識の方が根を張るんですよ」

グレイは、ルシフェルの左肩を軽く叩くと、安心を与えるような笑顔をルシフェルに見せる。

「明日の指揮は、とりあえず私が全てとります。他のみんなには適当にごまかしておきます。この少年のこともあるでしょうし、一日自由に過ごしてください」

グレイは、両手をめいっばい広げて言った。ルシフェルが、自分の心の内を話してくれたのは初めてであった。自分に対する評価も

聞けた。望んでいることも分かった。ルシフェルが、一步成長しようとしているなら、自分はその支えになろうとグレイは決意する。

「グレイ、あとは自分でなんとかする。明日は、指揮を頼む……」

「はい。では、失礼します」

グレイは、頭を下げて扉へと向かった。

「グレイ！」

「はい？」グレイは、呼び止められて振り向く。

「ありがとう」

ルシフェルは、グレイに微笑みかけた。それは、いつも見せる口角を上げるだけの笑みではない。目元と口元を緩めた、心からの笑顔であった。七年ぶりに見せるルシフェルのその顔に、グレイははちきれんばかりの笑顔を向ける。太陽のように笑うシェンとよく似たその笑顔は、ルシフェルの心をほんの少しあたたかくさせた。

第3章 揺れる心【1】

涙に濡れた頬を撫でる風が冷たかった。季節は春だが、早朝の風はまだ冷気をはらんでひんやりとしていた。先ほどから風が強く吹き始め、木々がざわついていた。

どうせなら、すべて吹き飛ばしてくれればいいのに。この私ごとルシフェルは、丘の中腹にいた。この丘は、城の広い敷地の中で最も高い所にあり、パールミレイ国が一望できる。その割に、年に何度か庭師が来る以外、人が来ることは滅多になかった。ルシフェルは、この場所が好きで、幼い頃から一人になりたい時には、ここに足を運んでいた。そして、ルシフェルが人知れず泣く為の場所でもあった。人前で泣くことを父から禁じられたルシフェルは、どうしても泣きたい時はここに来ていた。もう久しく涙は流していないが、昔は、よく部下を失った時に訪れていた。

昨夜、ルシフェルはシエンをここまで運び、埋葬した。一番高い場所にある木の根元を、彼の寝床とし、簡単ではあるが、木の枝で作った墓標を立て、その周りに花をたくさん植えた。そして、その場で泣きつかれて眠ってしまい、朝日で目が覚めたのだ。

睡眠時間は短かったが、魔力がほとんど果てていたせいで眠りは深かった。そのおかげで、疲労感は取れていた。おそらく、魔力がある程度回復したのだろう。若い証拠である。

ルシフェルは、そろそろ城へ帰ろうと丘を降りている途中、シエンの事を思い出し、また泣き崩れてしまっていたのである。顔を上げると、朝焼けで空が血に染まった様に見えた。

実際、血に染まっているのは私のこの手だ。

ルシフェルは、柔らかな草を掴んでいた手を離し、じつと自分の両手を眺めた。

数時間前、ルシフェルは生まれて初めてできた友人を失ってしまった。彼は、もう二度とルシフェルの前で笑うこともない。怒るこ

とも、泣くこともない。心に開いた大きな穴は、ルシフェルを底のない深い闇へと誘う。

シエンは死んでしまった。私が殺したも同然かもしれない。

「……………うう……………うう……………うう……………」

涙が溢れてくる。我慢しようとするればする程嗚咽が漏れてくる。

ルシフェルは、ドンツと拳を握り草の上に振り下ろす。何度も何度も打ち付ける。この動作をもうどれくらい繰り返しているのだろう。手を地面に振り下ろすことに飽きたルシフェルは、膝を抱えた。それでも涙は止まらない。どれだけ流せば涙は枯れるのだろうか……。

「シエン……………」

ルシフェルは亡くした友人の名を、風に消えてしまいそうな程小さな声で呟く。でもシエンは帰ってこない。

「私……………どうすればいい……………？　これからどうすればいい？　あなたもつと話しがしたかった……………もつと色んなことを教えてもらいたかった……………」

ルシフェルは、膝を抱えながら肩を震わせた。

「よお……………お前、こんなトコで何やってんだ？」

突然、上から聞こえた声に、ルシフェルが驚いて振り向くと、そこには長身の男が立っていた。目が隠れる程深くバンダナを巻いた、赤毛の男　　アツシュであった。

「何をしようとする勝手だろう。お前こそ何者だ？　用がないならさっさと行け。目障りだ」

そう言うのが早いか、ルシフェルは無言を言わずアツシュにエネルギー弾を投げつける。アツシュは、それをギリギリでかわし、ふわりと両手を広げた。

「危ねえなあ」

そう言って、アツシュは、パンツと手を合わせる。

「え？」

ルシフェルの手首が彼女の意志に反して合わさり、そして見えな

い手錠で拘束されたように、両手首が吸い付いて動かない。外そうと力を入れても、ビクともしなかった。

「ほれ」

「ええ!？」

もう一度アツシュが手を叩くと、今度はルシフェルの足首が、手首同様に拘束される。そのせいで、ルシフェルは急に安定を失ってしまい、そのままなす術もなく草の上に転がる。痛めた右側から地面に倒れ、たまらずうめき声をあげる。魔力は回復しても、ケガは回復していなかったのだ。歯を食いしばり、その痛みに耐える。

「いきなり魔法ぶつ放すなんて失礼な奴だな」

アツシュは、少し不機嫌そうに言うと、ルシフェルを見下ろした。「お前こそ何だ！勝手に人の敷地に入り込んで……、その上乱暴まで……」

ルシフェルは、草の上に転がった姿勢のまま、痛みに顔をゆがめながらアツシュを精一杯睨みつける。

「え？ ここお前の家なの!? 広ッ!」

「ここは王家の敷地だ」

ルシフェルは、アツシュを睨みつけながら冷ややかに言った。

「お前、ルシフェルか」

そつえば、こんな顔をしていたな……。

「つくづく失礼な奴だな。わかったら早く開放しろ」

「さっきまで泣いていたと思ったら急に妙な口調になって……、ほんつと、ガキらしくねえやつ」

ぞくつとする程の空気をルシフェルは感じた。

バンダナで目が隠れているせいで、表情が読み取れなかったが、一瞬、アツシュが纏う空気が殺気を発するかのように凍りついた。ルシフェルは、見えない拘束から解放されると、すぐに体を起こして半腰になり、条件反射で臨戦態勢をとる。ベルトで固定してある腿のナイフに左手が伸びる。

「……何者だ……お前……」

ルシフェルは、喉から声を絞り出した。

「俺の名はアッシュ。ここに居る理由は……迷子かな」

アッシュは、両手を顔の高さまであげ、苦笑いしながら答えた。

先ほどの空気が嘘だったかのように、今は陽気なオーラを発していた。

「迷子……?」

「そう、ちょっと空から落っこちてね」

「空?」

天を仰ぎながら言うアッシュにつられ、ルシフェルも明るくなってきた空を見上げる。

「……顔が見えないのは不愉快だ。そのバンダナを取ってもらおうか」

「……………」

アッシュは、ルシフェルに言われるままにバンダナをはずす。綺麗な緑の瞳があらわになる。その色は、ルシフェルよりも深い。ルシフェルと目が合うと、アッシュはニコリと微笑んだ。

「これで満足かな?」

「さあ」

ルシフェルは、言うが早いか、手を添えていたナイフを引き抜いて投げた。そのナイフの軌道は、アッシュの眉間である。アッシュは、それを軽く顔を傾けてかわす。ナイフは、アッシュの耳のすぐ脇の髪を掠めて後方へ消えていく。切られた髪が朝日に照らされ、舞い散る火の粉のように見えた。その間、アッシュは一步も動かずにルシフェルを見つめ続けていた。

ナイフを投擲したままの姿勢で、ルシフェルはアッシュと睨みあった。

「何なんだ、お前は……」

ルシフェルは、姿勢を正しながら言う。

「お前こそ……なんでこんなところで泣いてたんだ?」

「泣いてなんかいない!」声を荒げ、ルシフェルは言う。

「別に隠すことじゃあないだろう。人間誰でも、悲しい時は涙が出るものだ」

「涙なんて……感情なんて……そんな無駄なもの、とうに捨てた」
ルシフェルは、怒鳴ったことを取り繕うように、無表情でアツシユを見つめる。その頬に涙の流れた跡が見え、アツシユはニヤリと笑った。

「バツカじゃねーの？無駄ってなんだよ。捨てたって言う割りに、今怒鳴ったりしてるし……、昨日は感情をむき出しのままの攻撃してたじゃねえか……」

一瞬、空気が凍りつく。ルシフェルの双眸がギリリと輝き、アツシユを射抜く。

そして、ルシフェルはひとつの結論に達した。

「空から落ちてきたといったな……。貴様……。あの戦艦にいた者か」

……。ミスった。

アツシユは、口の端を上げて笑った。両手を大げさに広げ、肩を竦めてみせた。

「あの黒い髪の男はどうした」

「え？」

「フィラ国の助っ人かなんだかわからないが、あの戦艦に黒魔法使いが乗っていただろう」

黒い髪だって……？

「いや、あの戦艦に乗ってた助っ人黒魔法使いは、俺だよ」

アツシユは、つい正直に告白してしまった。そのまましばらくすればよいものを、事態をややくしくしてしまいそうな発言をした自分に、心の中で地団駄を踏む。しかし、後悔先に立たず、ルシフェルの目がみるみるうちに大きく開かれていく。

「お前が？ あの時見たのは黒い髪の男だったぞ？ 顔はよく見えなかったが、変装でもしてたのか？ それとも……」

黒髪の方がお前の本当の姿なのか……？

ルシフェルは、最後の言葉を飲み込んだ。そして、考えこむように顔をそむけた。

「あの時……、やっぱりお前も見えてたのか？ やっぱり、目が合ったんだな」

あの真つ白な精神世界で対峙したのは、間違いではなかった。アツシユは、なぜかその事実が気分が高揚した。自分の半身に出会ったような、奇妙な感覚が湧き上がる。

二人の視線が、再び交差した。

「……試せば、本人かわかるな」

ルシフェルは、言うが早いか後ろに飛んで間合いを取った。そして、その両手にエネルギー弾を形成する。

「おい、ちよつと待てよ！」

「問答無用！！」

ルシフェルは、アツシユの足元にそれを投げつけた。バク転をしてそれを避けたアツシユが、再びルシフェルを見ると、攻撃の手を休めず、次々とエネルギー弾を投げつけているのが見えた。

「お前なあ！！」

アツシユは、魔法障壁の強度をあげて攻撃を弾き飛ばした。

ルシフェルは、足を止めてアツシユと向かい合う。

「どんな理由があっても、あの戦艦に乗っていたのなら許さない」アツシユを睨むと、ルシフェルは集中力を高めた。そして、魔力を爆発させる。周りの空気が一瞬重くなり、空気が歪む。風がないのに草が揺れ、木々がざわめく。アツシユは、背筋が凍った。先ほど、怒りをあらわにして攻撃していたルシフェルと同一人物かと疑うほど、一瞬にして顔になんの表情もない、人形のような彼女になった。

ルシフェルが一步前へ出る。アツシユは、一步後退した。

長い沈黙が流れる。

ただ、見つめあうだけの沈黙ではなかった。お互いの魔力がぶつかりあい、不可視のせめぎ合いが行われていた。両者の中間では、

激しい魔力の衝突があった。空気が歪み、地面に亀裂が入る。わずかだが、ルシフェルがアツシユを押ししている。アツシユの額には汗が浮かび、その歩みを後退させている。

昨日の一件から、アツシユは睡眠を取っていない。首につけられた機械を外すため、悪戦苦闘していたのだ。その為、魔力は相当消耗している。アツシユは、ルシフェルも同様だと思っていた。しかし、わずかだが睡眠をとったルシフェルは、ほぼ回復していたのだ。その誤算は、アツシユを窮地に追い立てた。

静電気がパシツと音を立てた瞬間、両者は後方へ飛んだ。

ルシフェルが先に仕掛ける。

昨日、戦艦に向けてルシフェルが放った《裁きの光》の呪文を、彼女は唱えている。幾重にも重なった、巨大な円が目の前に描かれていく。ルシフェルの指先が産み出したそれは、産声をあげるように煌々と光り、動き始めている。

げええ……、コイツこんな唱えられる魔力あんのかよ！

アツシユは、ルシフェルのしようとしている事に青ざめる。そして、昨日そうしたように、《裁きの光》を受けるべく詠唱を始める。戦艦にいた魔法使いならば、この《裁きの光》を同じように受けてくれるだろう。ルシフェルは、詠唱しながらアツシユの出方を探った。緩慢な動きで、図形を描いているアツシユが、視界の端に写る。

なるほど……、あの図式で《裁きの光》を分散させたのか……。あそこをいじれば、分散から屈折になるな。

ルシフェルは、視界に映る図形に思わず感嘆の息を短くもらす。目の前の人物が、本物であると同時に、かなり高度な知識を有している事実、ルシフェルは興奮する。ずっと感じることのなかった高揚感が、体の奥底から湧き上がってくる。好敵手を見つけたような喜びが、ルシフェルの全身を駆け巡った。自分と同等の力を持っている者がいるのは、にわかには信じがたかったし、ありえないと否定していたが、実際に目の前になるとすんなりと受け入れる事が出

来た。

両者の詠唱が、終わる。

魔力のぶつかり合いで、突風が起こる。魔力を生み出す力と、それを壊す力が正面でぶつかりあっている。自然をも捻じ曲げるその威力に、耐え切れずに空気が悲鳴を上げる。嫌な音を周囲に響かせながら、アツシュを少しずつ押し去っていった。一歩も譲らぬ両者の睨み合いは、一瞬であるようにも、数分であるようにも思えた。両者の額に汗が浮かび、その足元の地面が軽く凹む。しかし、アツシュの魔力は限界に近づいていた。

「あの時やっただように、曲げてみせろ」

ルシフェルは、アツシュを挑発するように言った。

「そのほうがいいな……」

はじめっから屈折にときゃよかつたぜ……。なんで俺同じこと繰り返してるんだらう。

言うが早いか、アツシュは手早く図式の一部を書き換えて、属性を変化させた。それと同時に空間が歪み、ルシフェルが放った魔法が捻じ曲がる。アツシュは、曲がると同時に下から掬い上げるように腕を空へと向けた。その動きについていくように、魔方阵も天を仰いだ。そして、ルシフェルが放った光の柱は、近くの木々を消滅させながら空へと消えていった。

魔力をほぼ使い果たしたアツシュは、たまらず膝から崩れ落ち、両手を地につける。肩で息をしながら、ルシフェルを見上げた。《裁きの光》を詠唱しても尚、凜と立ち続けるルシフェルに、アツシュは感服する。

あいつの魔力は底なしかよ……。

「なぜ、レーザー砲を曲げた」

「お前はフィラ国の助っ人なんだろう？　なぜレーザー砲を曲げたんだ」

「目の前で人が死ぬのなんて見たくないしな」

「我々は戦争をしているんだぞ？　やらなければやられる」

「俺は元々無理矢理助っ人させられてたワケだし……」

「嫌ならなぜ戦争に」

「ああー、もう外したが、変な機械をつけられて、強制的に攻撃させられていたんだ」

アッシュが嘆息すると同時に、ルシフェルは左手を静かに上げた。ルシフェルの指先から青白い光が零れ落ち、空中に図形が浮かび上がっていく。風によつて、アッシュの耳にルシフェルの詠唱が聞こえてきた。

もう、ほとんど魔力はカラなんだが……

アッシュは、軽く舌打ちをしながら体を起こす。そして、ルシフェルと同じく、空中に図形を描き始めた。青白く光るルシフェルのものに対して、アッシュのそれは、緑色だった。

なにあの図形……あんなの見たことない……。

ルシフェルは、アッシュがそこに描いた緑色の図形を見て驚いた。自分は、この世にある全ての魔導書を可能な限り、読破したつもりであった。しかし、目の前と同じものはどれにも載っていないかった。アッシュが生み出した魔法だしたら載っていないなくても仕方がないが、自分ならともかく、どこの馬の骨かわからない奴が、自分の召還魔法に対抗しうる魔法を生み出すなんてことは、天地がひっくり返ってもありえないことだと思っていたのだ。

ルシフェルは、頭を軽く振って印を結ぶことに集中した。

「……その牙を持って彼の敵を食い干切れ！！ 出でよ！ フェンリル！」

ルシフェルは、最後の印を結び、詠唱を終える。そして、青く光る図形を手のひらで勢いよく触れた。

バチバチと静電気の音が聞こえ、獣の咆哮が辺りにこだました。図形が倍の大きさまで膨れ上がり、ルシフェルの前の空間が歪み始める。ひんやりとした風と共に、そこから獣の前足が出てきた。ゆっくりと咆哮しながら、フェンリルが現れる。銀色に光るその見事な毛並みが陽光に反射してキラキラと光っている。軽く開かれた口

から、獰猛さをあらわすような牙が光り、吐息が白く見えた。

「折角来たところ悪いけど……、帰ってもらおうよ」

アッシュは、ニコリと笑うと両手を顔の前でパンツと鳴らし、そのまま両手を広げた。すると、緑の図形も倍の大きさに広がった。と、同時に、ルシフェルによって、この世に具現されようとしていた半身のフェンリルが、シュツとそこに吸い込まれていった。

一瞬の出来事で、ルシフェルは何が起こったのかわからないまま立ち尽くした。召喚獣が、召喚主の命令以外で帰ることはありえない。召喚主が開いた門ゲート以外では帰れないはずである。しかし、目の前で、フェンリルはアッシュによって開かれた正体不明の門で帰ってしまった。

ルシフェルは、愕然として膝をついた。

「なんで……、どうして……？」

ルシフェルは、そのままへたり込んだ。

第3章 揺れる心【2】

「私の負けだ……」

「へ？」

アツシユは魔力が尽き、これ以上攻撃してきたらどうしようかと懸念していた所だった。思いも寄らぬルシフェルの言葉に、つい間の抜けた声になってしまった。そんなこともつゆ知らず、ルシフェルは落胆し、その顔には絶望が見えた。

「私が放つ魔法……、お前にことごとくはねのけられてしまう。もう……何を唱えていいかわからない……」

「いやあ……十分スゲエと思うけど？ アンター一人の為にフィラ国だつて頭抱えてるんだぜ？ 俺の今は反則技。門を開く方法^{ゲート}を知人から教えてもらっただけで……」

うなだれるルシフェルに驚き、アツシユはあせった。

ルシフェルは、今の出来事と昨日の出来事を考え、アツシユが自分よりもはるかに高い魔力を持っている事を確信した。自分の知らない魔法も知っている。ルシフェルは、アツシユを侮っていた自分を、ひどく情けなく思った。自分は世界一の魔法使いなどではなかったのだ。非力で、シェン一人を守ることもすらできなかったちっばけな魔法使いなのだ。

「でも……私は……フィラ国を悩ませることはできても、一人の間を守ることもできない非力な……ちっばけな存在……」

ルシフェルは、話しているうちに、シェンの事を思い出す。流すまいと思った涙が、再度瞳を潤すべく湧き出てくる。シェンの事となると、自身を取り繕うことができなくなるようだ。それは、まだその傷が癒えていないからなのだろう。

「そんなことは……」

「もつと強くなりたいんだ、今の技を教えてください！」

落胆しているルシフェルの肩に手を置こうとしたアツシユの腕を、

ルシフェルは掴んだ。

「おいおい、こりゃ企業秘密だ」

「でも、もつと強くなりたい」

ルシフェルは、瞳に涙を溜めながらアッシュに懇願した。アッシュは、あわてて目を逸らす。

「なぜ、そんなに強さにこだわるんだ？」

ルシフェルは、視線を泳がせる。一瞬ビクツとし、地面を見つめた。

「お前が力をふるう理由はなんだ？」

「私が力をふるう理由は、戦争をなくす為。国民のためだ」

「国民を守るためってのはいいが、戦争をなくす為の戦争ってのは矛盾してないか？」

「なぜ？ 戦争が起こらないように世界を一つにまとめるのだ。そうすれば国同士の戦争はなくなるだろう？」

ルシフェルは、シエンとも同じ会話をしたことを思い出していた。そして、思い出しながら、自分が同じことを言っていることにめまいを覚えた。ひどく頭が痛む。シエンを失った悲しみ、怒りは、戦争への悲しみであり、怒りであったはずなのである。しかし、今、自分はまた同じことを言っている。

自分の心が二つに分かれてしまったように、二つの相反する考えがルシフェルの心に混在していた。シエンを失い、戦争の愚かさを知ったつもりだったが、やはり、シエンのような犠牲者を出さないために戦争が必要だと行き着くのである。

「力で得た平和は長続きしない。すぐに歪み、亀裂が生じる。これは永遠のテーマじゃないかな？ 十人いれば十通りの考えがある。みんなが一つのものを目指していても、人の数だけ方法がある。平和を求めても戦争がおきる。人は争うことを定められた運命なんだ。アダムとエヴァが楽園で知恵の実を食べたその時から」

アッシュは、痛みに耐えるような顔をしてルシフェルを見つめた。

「でも、父は……戦争がない国を作るために、世界をひとつに……」

「父親の考えしかいわないんだな。お前自身はどう思ってるんだよ」
「父の言うことは、正しいことだ……それが私の全てなんだ！」

ルシフェルは、視線が定まらない様子で宙を眺めながら言った。
「俺は、昔、どうしても避けられない戦争で大切な人を失った。戦うとはそういうことだ。何か犠牲になる。それでも正しいことなのか？」

「戦争で死ぬことは名誉なことだと父が言っていた」

「そんなわけあるかよ……」アツシユは、搾り出すように言った。

「昨日、ファイラの戦艦がお前の近くにレーザー砲を落とすしたな。それで、あの野営にいた人間はお前以外全滅だった。あれは……、あそこにあった全員は名誉な死だったのか？」

アツシユは、ルシフェルの肩を掴んだ。定まらなかった視線が、アツシユと交差する。

「シエンが死んだ時はそう思わなかった……」

ルシフェルの瞳から大粒の涙が零れ落ちる。

朝日に反射し、それはキラリと光った。アツシユは、不謹慎にもそれを美しいと黙っていた。

「シエンというのは、あの時お前が抱きかかえていた少年か？」

「そう……戦場に紛れ込んでいたんだ。たった数時間しか一緒にいなかったが、シエンは私に違う世界を教えてくれた。大切な……」

「そのシエンが死んだ時はどう思ったんだ？」

「心がしめつけられるように……痛かった……」

「それが悲しいってことだろう？ 戦争で死ぬことが名誉じゃないって思ってたんじゃないか？」

アツシユは、ルシフェルの肩を少しゆする。それに反応して、ルシフェルは体を強張らせる。

「なぜ……、シエンが死ななくてはいけないのか、分からなかった……」

「答えはでたか？」

「戦争……、強さ……、戦争が終われば……、私に守る強さがあれ

ば……。結局考えても行き着く先は同じなんだ……。ッ！ 戦争が終わればいい。父は戦争をなくす為、世界の王となる選択をした。そのやり方が間違っているのか？」

ルシフェルは、少し興奮しながら嗚咽混じりに言葉を吐き出した。「どのやり方が正しいかなんて誰にもわからない。お前は自分で考えて、自分で答えを出さなければいけない」

「教えて……。お願い……。私はどうすればいいの？」

ルシフェルは、アツシュにすがりついて大声で泣き始めた。総帥としての体面を保つために、本来の自分を押し殺していたが、その仮面が剥がれ始めた。泣くことを父に禁じられ、今まで気張ってきたルシフェルだったが、シエンの死と自信の喪失と共に、限界がきたようだ。

「お願い、私の心を救って！」

ルシフェルの泣き声は、アツシュにはそう聞こえた。全身で助けを呼ぶような悲痛な泣き声に、アツシュは戸惑い、その肩にそっと手を置いた。

「お前は、父親の言うことを真実だと思い込んでるんじゃないのか？」

アツシュは、ルシフェルの肩をやさしくなでながら言う。

「今まで自分で考えたことはなかったのか？」

「父の……。言うことは絶対ですから……。父の言う通りに……。私は生きればいい……」

アツシュは、そう言ったルシフェルに顔をしかめる。

「そこまで父親にこだわる理由はあるのか？」

「……………」
ルシフェルは、しばらく考えた後、小さくうなずいた。

「そうか……。理由があるのか……」

アツシュは、すでに高くなってきている太陽を見上げ、目を細めた。

第3章 揺れる心【3】

「私は妾の子です」

今まで押し殺していた感情をいつきに吹き出し、我慢することなく泣き続けたせい、ルシフェルの心はとてムクリアになっていた。誰に相談するわけでもなく、常に葛藤していた心を解放したルシフェルは、今度は誰かにその思いを伝えたくなくなっていた。今まで自分の中だけに秘めてきたことを、今日会った男、しかも、昨日まで敵陣にいた男に語り始めた。いや、全く関係のない第三者だからこそ、ルシフェルは話すことができたのかもしれない。そう、本来のルシフェルに戻って……。

魔法でもかけられたのかと思う程、ルシフェルはアッシュに安心感を感じていた。それは、ルシフェルが、遠い昔父親に感じた大きな安心感に似ていた。全てを話す覚悟が彼女にはできていた。

「私が失敗すると、母がけなされる……。偶然、侍女達の話からしてしまったの……。私が悪戯ばかりするのは、母の育ちが悪いからだ……。だから……。死ぬ気ですがんばりました。父が望むように、父の教えの通りに生きてきたの。それが正しいと思っていたし、そうするべきだと思った」

ルシフェルの出生は、パールミレイ城では周知の事実であった。侍女の身でありながら、国王と関係を持った女。その子供が国王の寵愛を受け、城内で何不自由なく暮らしている。それゆえ、ルシフェルは、城の中ではよく思われない存在でもあったのだ。

当時のルシフェルは五歳。嗜好きの侍女の心無い一言は、彼女の心に深い傷をつくっていた。

「この国で生きていくには、そうするしかなかった……」

アッシュは、ルシフェルの手を握りながら静かに話を聞いていた。「父は、私を愛してくれました。色々教えてくれた。私は、それを全部覚ええました。父が戦争を正しいと思うなら、その通りに。父が

力を望むのであれば、私はその力になりたかった」

「だから、強くなるうと思っただのか？」

「そう……はじめはね。そうすれば父が喜ぶもの……。それに、城中のみんなが私を認めてくれる。母のことだって、悪く言われることはなくなる……。でも、次第に、父が戦争で世界を統一しようとし始めた。その為に、国の為に強くなるうと思っようになった。シエンのことがあっても、戦争のどこがいけないのかわからない……。国を守るために戦うことで、私はここにいられるもの。戦うことが、私が生きる全てでなんです」

ルシフェルは、そこで深い溜め息をついた。

「五歳で黒魔法軍に入って七年。その間、たくさんの人が死んでいった。頂点に立つものとして、非情に徹することで、感情が麻痺してたのかもしれない。同僚や部下が戦争で死んでいくことを“名譽”として、自分が傷つくことから逃げていたのかもしれない……。だって、はじめは辛かったもの」

「そうか、今までよく一人で頑張ったな」

アッシュは、ルシフェルの頭に手を置いた。優しく二三度撫でると、そのまま抱き締めた。

突然のことで、ルシフェルは混乱した。

そして、安堵する。

ようやく落ち着いたと思った涙が、まだ零れ落ちてくる。泣くことをやめたせいで、涙が大量にストックされているのかと思うほど、とめどない。ルシフェルは、もう泣くことをやめることができなかった。

(優しくしないで……)

それは言葉にならなかった。

五歳で黒魔法軍に入団してから、ルシフェルは感情を殺し、誰にも甘えることなく訓練に集中していた。優しくされることなんて、一度もなかった。だから、優しくされると、どうしていいのかわからなくなる。

アツシュにすがりつき、許しを乞うように泣き続けた。

「誰よりも強くなりたいなら……、誰かを守りたいなら……：自分を守れ」

「じつ……自分を……？」

「そう、自分の心を守れ。怖さを知れ。それが力になる」

アツシュは、ルシフェルの肩を掴み、抱きついていて彼女を引きはがす。そして、じっと目を見つめた。父親が子供に言い聞かせるように……。

「感情は無用のものではない。お前は機械じゃないんだ。うれしさを感じ、悲しみを感じ、相手を思いやればいい」

「相手を……思いやる……」

「お前がシエンを失って悲しいと思ったのを同じように、敵国の死んでいった兵士の家族も同じように悲しむんだ。それが戦争だ。戦争をなくすために戦争をするんじゃないかと、戦争を起こさないようにするののも一つの手じゃないか？」

「戦争を……起こさないように……」

「そう、そういう選択肢もあるんだよ。それが、相手を思いやるってことだ」

アツシュは、ニコリと笑ってルシフェルを見つめた。

「お前は誰かを失う悲しみを知った。大丈夫、お前ならできるよ」
青天の霹靂であった。

戦争を起こさないようにする。という選択肢は、ルシフェルの中に今までなかったことである。世界を統一し、力づくで言うことを聞かせることが最善だと思っていたし、それ以外に方法はないと思っていたのだ。

「父はそれを受け入れてくれるでしょうか」

「それはお前次第だ。お前が、それを父親に語れるだけ考えてから話すといい」

「考え……る……？」

「そう。今、俺が言ったことは俺の考えだ。それをそのまま父親に

話しても、言い負かされるだけだろう。ちゃんと自分で考えて、納得した答えでなければ人は動かさせない」

アッシュは、ルシフェルの背中を軽く叩いた。それは、激励であり、戒めでもあった。

「頑張れよ」

ルシフェルは、優しく笑いかけるアッシュに安堵した。

自分は、誰かにこうしてもらいたかったのかもしれない。頭を撫でてもらったり、抱き締めたりしてほしかったのかもしれない。シエンに心を許したのは、笑顔を自分に向けていてくれたからかもしれない。

今、ルシフェルは自分の心を理解しようとしていた。

「……シエンと……もっと話がしたかったな……」

ルシフェルは、アッシュに笑いかける。もういない友の名を呼ぶその声は、か弱く、笑顔も少し憂いを帯びていた。

「私に白魔法が使えたら……シエンは助かったのかな」
ルシフェルの言葉に、アッシュはハツとする。

「そういや、話は変わるが……お前本当に黒魔法使いか？」

「え？ どういう意味ですか？」

「いや、違うならいいんだ」

アッシュは、口を押さえてルシフェルから目を逸らす。

「何なんですか？ はっきりいってください」

あからさまに目を逸らしたアッシュの顔を、ルシフェルは無理矢理自分の方へと引き寄せる。アッシュの首が軽くグキツと鳴る。

「いや、その……魔力が人工的っつーか。遺伝子操作でして黒魔法使になったのかなあ？」と

ホログラム

アッシュは、戦艦の中で見た立体映像で感じた違和感の正体を、先ほどの戦いで感じ取っていた。常人では感じ取れない微妙なことであったが、アッシュは、ルシフェルから発する魔力に人工的な匂いを感じていた。

「遺伝子操作……？」

「いや、違つならいいんだ……。あつ、お前の魔力は本物だぜ？
ただ、元は白魔法使いか……。もしくは白魔法も黒魔法も両方使えた
のか……」

アツシユは首をひねって「うーん」と唸り始めた。

「そんな話……。父から聞いた事ありません」

「もしかしたら、お前白魔法の素質あるかもしれないぜ？ 習つて
みたらどうだ？」

アツシユは、ニヤリと笑つてルシフェルの肩を叩いた。

「あなたは不思議な人ですね」

「ああ？」

「私、さっきの話は誰にも言ったことなかった。ずっと自分の中だ
けの秘密にしようとしたのに……。それに、白魔法のこと、あなた
が言つと、できそうな気がする」

ようやく年相応の、子供らしい屈託のない笑顔をルシフェルはア
ツシユに見せた。

「さあ、もう城に戻りな。多分、この戦争は終結する。お前はゆつ
くりと自分のことを考えればいい」

そう言つてアツシユはルシフェルの頭をポンと叩いた。瞬間……
な……。なんだこれ……

アツシユの脳裏に、まるで走馬灯が駆け巡るように映像が次々と
流れ込んできた。グルグルと様々な断片的な映像が回る。自分の姿、
仲間の姿、見たことのない人々、父の姿、母の姿、そして、どの場
面にも自分の隣にいる髪の長い女……。笑っている、泣いている、怒
っている、そしてまた笑っている、愛しい人……。その肩に乗つた
小さな……

バチッ！ と指に静電気を感じ、アツシユは我に返る。

「静電気？」ルシフェルは、自分の頭を抱えてアツシユを見上げる。

「どうしたの？」

不思議そうに自分を見上げるルシフェルを見ながら、アツシユは
自分の手を見つめる。

「え？ お前、今の見えなかったのか？」

「うん？ 何を見たの？」

「幻か……？」

アッシュは、もう一度自分の手を見つめながら小さく呟いた。

「？」

「さあ、お前は早く城に戻れ。俺も仲間のもとに帰るよ。縁があったらまた会おう」

アッシュは、ルシフェルの背中をトンと押した。それに促されるようにルシフェルは歩き出す。

「また会える？」ルシフェルは、振り返ってアッシュに言う。

「お前が望んだらな」

アッシュは、そう言っただけ意味深に笑った。

「ありがとう。私あなたに会えなかったら、シエンの死から立ち直れなかったかもしれない」

すでに歩き始めていたアッシュは、振り返らずに手を上げてルシフェルに答えた。しばらくルシフェルはアッシュの後姿を見ていたが、どんどん歩いていくアッシュに、諦めて城へと歩き出す。

ルシフェルが諦めて城へ向かったのを背中で見ると、アッシュは足を止めた。

「さて……、お姫様のために一肌ぬぐかな」

アッシュは、空を見上げてそう言った。

第4章 私を救ってくれた人たちへ【1】

アッシュが言う通り、ルシフェルが城に戻ると、フィラ国からの使者が来ていた。

フィラ国はパールミレイ国に降伏したのだ。

アッシュという戦力を失い、ルシフェルの力を目の当たりにしたフィラ国はそれしか道がなかった。束の間の休息といったところだろう。フィラ国はすぐに新しい武器を開発してパールミレイ国に宣戦布告をしてくるに違いない。

いつものルシフェルなら、何度でも何度でもパールミレイの力を見せ付け、フィラ国が諦めるまで潰してやる。と、フィラ国が降伏する度に思っていたが、今はそう思えなかった。

できることなら、宣戦布告してきてほしくないな……。

ルシフェルは、ぼんやりとそんなことを考えながら父である国王のいる部屋へと続く長い廊下を歩いていった。いつもは何も感じない廊下が、今日はひどく長く感じる。足取りが重い。

ようやく、ルシフェルは国王の書斎へと辿り着く。ゆっくりと頭をあげ、その全貌を眺める。鼓動がわずかに早くなるのを感じた。意を決して扉を叩く。

「ルシフェルです。入ります……」

重い扉を開くと、執務机に向かって書類を読む国王と、その脇でお茶の用意をしている執事の姿が見えた。

「どうした」少し顔をあげ、国王はルシフェルを一瞥する。そしてまた書類に目を落としながら「少し待ちなさい」と、言った。

国王、アレンパールミレイは今年で四十九歳になる。ルシフェルと同じ栗色の髪に、ほんの少し白髪が混じっている。瞳の色は澄んだ青^{ブルー}。目元と口元に年齢を刻んだ皺が見えたが、精悍な顔立ちをしているせいで、三十代といっても通用するような外見であった。

「フウ」

羽ペンを置いて、国王は溜め息をついた。執事は、国王のカップに紅茶を注ぎ始める。一瞬香りがたち、国王は目を細めた。

「それで、どうしたんだ？ ルシフェル。珍しいな、ここに来るとは……」

腕を組んで、国王はルシフェルを見つめる。

「知つての通り、フィラ国が降伏した。今回も我が国の勝利だ。お前もよくやったな」

国王は、口の端を上げて笑ったが、目は笑っていないかった。

「……教えてほしいことがあるのです」

今回の戦争の話は、どうでもよかった。いつもなら、国王にこうして勝戦を褒められ、有頂天になっていたルシフェルであったが、今回は褒められてもうれしくなかった。むしろ、悲しみの方が大きく、心臓をギュウツと掴まれているように胸が痛かった。

「ほう？」

「戦争のこと……」

ルシフェルは、消え入りそうな声で言う。ギュツと手を握り、そして下を向いた。

「戦争？ 戦争がどうしたんだ？」

「父上の、戦争に対するお考えをもう一度聞かせてください」

ルシフェルは、戦争について考える前に、国王の考えをもう一度聞こうとここへやってきた。判断材料は多い方がいい。国王の話を聞いた後にも、色々な人の意見を聞いてまわるつもりだった。

「今回の戦争は、確かに我が国が勝利しました。しかし……、友人が死にました。それに、第六部隊は全滅です……多くの命が奪われました……私の……落ち度です……」

ピクツと国王の眉が動く。

「友人？」

「はい……。戦場に紛れ込んでいた一般市民でした。その」

「教養のない一般市民の言うことを真に受けるな！ お前は私の言うことだけを聞いていれば間違いない！ 忘れたのか？ 世界を統

一させて戦争をなくすのが私の目的だということをして！ 市民の安全の為に私がしていることに、何を言うかッ！」

国王は、ルシフェルが言うのを遮って怒鳴り、両手でドンツと机を強く叩いて席を立った。衝撃で手元にあったティーカップが床へ落ちて四散した。執事は、それを見てすぐに破片を拾い始める。

「それに、第六部隊の全滅だが……、確かに、一部隊まるごとの損失は痛い。しかし、今回の勝利の為の名誉の戦死だ。お前が気に病むことはなかるう。それに、第六部隊の側にお前がいたと聞いている。だが、お前は生きている。第六部隊の連中が弱かった。それだけのことだろう？」

国王の言動に、一瞬硬直したルシフェルだったが、すぐに目線を交差させる。お互いにじつと見合ったまま時間が過ぎていった。

「……父上のお考えはよくわかりました。最後に一つだけ質問をさせてください」

「なんだ」ゆつくりと椅子に身を沈めながら国王が答えた。

「私は……、本当に黒魔法使いとして産まれたのですか？」

執事の体がわずかに強張る。ルシフェルはそれを見逃さなかった。

国王の方はルシフェルを見たまま微動だにしなかった。

「誰から聞いた？」

その返答だけで十分だった。答えは明確である。アッシュが言うように、ルシフェルは遺伝子操作によって黒魔法使いになったのだ。……失礼します」

ルシフェルは、国王の顔も見ずに足早に部屋を出て行った。

「この城にあの事を知っている者はまだいるのか？」

国王は、執事に顔を向けながら言う。

「おりません」

「一体誰が……」

国王は、視線を窓に向けた。

一般的には知られていないが、とある生物学者が遺伝子の研究をしていた。その学者が熱心に研究していたのは、人間の魔法の素質

を決める遺伝子の研究であった。学者はその遺伝子の事を「魔因子」と名づけた。

この魔因子は今のところ三つの種類に分けられ、黒魔法使いとなる魔因子は「黒魔因子」、白魔法使いとなる魔因子は「白魔因子」、召喚士となる魔因子は「召喚魔因子」となる。

この三つの魔因子は誰でも持つており、どの魔因子回路チャンネルが開いているかで使える魔法の種類が決まるのである。稀に複数開いている場合もあるが、通常は本人の素質、魔力量などの関係から一人一つの回路しか開いていなかった。

この魔因子の閉じている回路を人工的に開く研究をしていたのがその生物学者であり、密かに実験を成功させていた。その話を聞きつけ、国王はパールミレイ国へと迎え入れたのだ。

てつきり黒魔法使いとして産まれてくるものだと思っていたルシフェルが、検査の結果白魔法使いだった。しかし、自分の血をひいているルシフェルは、遺伝子的には黒魔法使いの素質があると国王は信じていた。

そして、うわさの生物学者によって、ルシフェルの白魔因子の回路を閉じ、かわりに黒魔因子の回路を開いたのだ。

「命じられた通り、あの件に関わった者全員に忘却術を施し、国外追放いたしております。あの学者にすら忘却術をかけ、研究データも全て消去しました。」

「あの事実を知っているものは、私とお前の二人だけだ……」

国王はジツと執事を見つめる。

「お前がルシフェルに言うわけがない……な。誰ぞに母親の話でも聞いたのか……。あれは血筋のいい白魔法使いだったからな……」

「城の侍女達は皆噂好きですから、そこから漏れた可能性もあります」

「ふむ……」

母親が白魔法使いだったという事実を知っただけで、自分が元々白魔法使いだったと考えられるものなのか……。

国王は、目を閉じて唸った。

ルシフェルの母親か……。戦争において、身を守る術を持たない白魔法使いなどなんの役にも立たぬ。他人を守るために命を落としたりお前と、同じ運命をルシフェルにはたどってほしくないのだよ。例え、お前がルシフェルに同じ白魔法使いとしての人生を送ってほしかたつとしてもな。

「……アリシア……」

国王は、今は無き、最愛の人の名を口にした。

第4章 私を救ってくれた人たちへ【2】

ルシフェルは、黒魔法軍本部の廊下を走っていた。国王の執務室を飛び出した後、自然と足が向かったのはここだった。そして、頭に浮かんだのはただ一人。

執務室を探したが、誰もいない。廊下を歩いていた隊員に聞くと、隊長クラスは全員会議室へ向かったらしい。走る廊下の先にあるのは、会議室。その扉を勢い良く開けた。

突然の出来事に、ビックリして入り口を見る各部隊長をルシフェルは見渡した。第六部隊長のジョニーの席は空席になっている。少し顔をしかめ、すぐに元の顔に戻す。

「 그레이、着いて来い」

ルシフェルは、話の中心になっていた 그레이 を有無を言わずに連れ出し、足早に廊下を歩いていく。

「総帥、今、第六部隊の話……」

「その話は後で聞く。今は黙って着いて来い」

各部隊長は、全滅した第六部隊についての話し合いをしていた。今までも隊長クラスに欠員が出たことは何度かあるが、一個部隊全滅するケースは初めてであった。ルシフェルがいない間に会議をすることに少し抵抗があったが、知らず知らずの間に皆が集まり、会議のようになっていた。といっても、意見交換をし始めたばかりであったが……。

無言のまま、二人はルシフェルの執務室へと到着した。

「すまない。二人だけで話しがしたかったんだ」

ルシフェルは、椅子に座ると、手を額の前で組んでそこに頭を乗せた。

「総帥、ご気分は……」

그레이 は、心配そうにルシフェルを見つめる。今朝の一件からまだそれほど時間がたっていない。 シェンの事から立ち直るには早

すぎるだろうと思ったのだ。

「……戦争……」

「え？」

「まず、戦争についてのお前の意見を聞きたい。以前言っていたことと同じことでもいい。お前の戦争に対する考えを聞かせてくれ」

ルシフェルは、下を向いたままの姿勢でグレイに言った。

とりあえずグレイを呼んだものの、何から話していいかわからず、ルシフェルはまず戦争のことを聞いた。

「簡単に申し上げますと、戦争とは……、何かを解決するための最終手段であると思います。」

子供のケンカの延長線上のようなものでしょう。話して解決できないから手を出す。両国の間で合意がとれないから武力で押さえつけようとする。勝者が敗者を力づくで言うことをきかせるなんて、双方納得がいくわけがない。

それに、血を見ない戦争はありません。誰かが傷つき、血を流し、命を落とす。避けられない戦争中にはあるでしょう……。でも、戦争をするのは最終手段であって、我が国とフィラ国の間柄のように、些細な原因での戦争には同意しかねます」

グレイは、恐る恐る語った。今まで、何度同じことをいつてきても、ルシフェルに一蹴されるだけだったあらである。しかし、シエンを失い、戦争に対して疑問を持った今であるからこそ、思いが伝わるのではないかと思っていた。

下を向いたまま、ルシフェルは黙って聞いていた。

「……そうか……」

「はい」

フウと短い溜め息をつくつと、ルシフェルは顔を上げてグレイを見つめた。

「お前は、私の母がどんな身分だったか知っているな」

「え？ え……ええ……」

「それ以外で、私の出生の秘密を知ってるか？」

「……といいますと？」

グレイは、突然のことに首を傾げた。

「お前だけには話そうと思う……私もついさっき事実を知ったばかりで……」

ルシフェルは、そこで一度言葉を切り、立ち上がった。ゆっくりとグレイの前まで行くと、手のひらに小さな魔法の球体をつくりはじめた。

「お前もこれと同じエネルギー弾を作ってくれるか？」

「は……、はい」

グレイは、ルシフェルの言う通りに、同じものを作り出した。

「違いがわかるか？」

グレイは、腰を曲げ、ルシフェルと同じ高さまで手のひらを持っていった。

「違い？ 魔力の差ですか？」

エネルギー弾は、自身の魔力を練り上げ、球体状にしたものである。詠唱することなく、簡単にできるので、魔法戦では威嚇攻撃などに使っている。二人の手のひらの上で、球体は同じように青白くゆらゆらと揺れていた。多少の魔力量の違いはあるものの、それ以外に相違は認められなかった。

「私にも、違いがわからない」

「色も、形も特に変わったことはありませんが……」

「違和感を感じるか？」

「いえ……なにも……」

「そうか」

ルシフェルは、そう言うと、球体を消した。そして、ゆっくりと執務机の方へ歩いていき、机にもたれかかった。

私には、生粋の黒魔法使いとの差がわからない。違和感も感じない……。彼は、私の力をはるかに凌駕した、偉大な魔法使いだったのか……。

「私は遺伝子操作で黒魔法使いになっただけらしい」

「え!？」

「元が白魔法使いなのか、召喚士だったのかはわからない。どこの科学者が、黒魔法の回路を遺伝子レベルで開いたのだろう」

「……………」

グレイは、開いた口が塞がらず、少し間の抜けた顔をルシフェルに向けていた。

「そんな技術があるのかはわからんが、考えられるのはそれしかあるまい。ある人物に指摘されてな。魔力が人工的だと……。父上に聞いたのだが……。明確な答えではなかった。しかし、そこからそれが真実だと言うことが分かったんだ」

「総帥……。一体……」

「私は……。総帥の資格があるのだろうか」

たった一日の間に、ルシフェルの世界が変わりすぎた。小さな世界で懸命に生きてきたルシフェルの肩には、何万、何億人の、パールミレイ国やパールミレイ国が制圧した国々の命が乗っている。幼い頃から出生に悩み、国王からの帝王学で感情を殺したルシフェルは、さらに大きな壁にあたっていた。十二歳が抱えるには問題が大きすぎる。グレイは、そんなルシフェルの心の痛みを少なからず感じ取っていた。

「総帥は、総帥のままでもいいと思いますよ」

グレイは、ニコリと笑いながらルシフェルに言う。

「遺伝子操作で黒魔法使いになったとしても、総帥が……。ルシフェル様がルシフェル様であることには変わりありません。七年間一緒に過ごし、慕ってきたルシフェル様です。確かに、遺伝子操作の件は驚きましたが、それで何かが変わるわけではないです。総帥はルシフェル様以外ありません。今まで通り、少々厳しい総帥のままです。でいてください」

最後に苦笑いして、グレイはルシフェルに言った。

ルシフェルは、今にも泣きそうな顔をしてグレイから目をそらす。「ありがとう」

消え入りそうな程小さな声で、ルシフェルはポツリといった。

「私の魔力が人工的だと指摘した奴が、白魔法の勉強をしてみてもどうかと言ってくれた。私を取り寄せようとする都合が悪い……。悪いが、グレイ、お前が魔道書を手にいれてくれないか？」

「白魔法……ですか？」

世界最高峰の魔力……黒魔法、召喚魔法……、これ以上何を望むというのか。白魔法まで使えるようになったら、賢者である。齡十二歳にして、伝説の人になろうと言うのだろうか。

「できるかどうかかわからないが、試してみたいのだ。必要なら……、もう一度遺伝子操作をしてもいい。その時は、お前に全てを託す」

「ちょ……ちょっと待ってください！ たった今、総帥はルシフェル様以外ありえないと言ったばかりではないですか！ 私に全てを託すって……無理ですよ！ そんなの！」

グレイは、顔の前で大きめに手を振った。

「今はまだ、総帥のままにいる。私も少々ここで自分のことを調べたい。でも……、自分が、もし白魔法使いであったのなら……、黒魔法使いとしての人生は捨てるつもりだ」

「そんな……」

「お前が、私のことを認めてくれたから、決心がついたのだ」

ルシフェルは、屈託のない笑顔をグレイに見せた。それは、初めて見るルシフェルの表情だった。迷いのない、清々しいまでに綺麗な表情であった。

「わかりました……総帥がそうお決めになったのなら、不肖ながら応援させていただきます」

グレイは、機敏に頭を下げた。

「わかっているとと思うが、口外するなよ」

「はい！」

意気揚揚と扉から出ていくグレイの背中を見ながら。ルシフェルはもう一度「ありがとう」と呟いた。

第4章 私を救ってくれた人たちへ【3】

ルシフェルは、肩の荷が下りたように気分がよかった。

戦争のことは未だにわからない。自分の出生についても疑問がいつぱいである。しかし、自分には未来が見えた。廊下を歩きながら、ルシフェルは、自分への無限の可能性を初めて感じていた。

「ルシフェル！」

「……フレアお姉様」

振り向くと、そこには一つ上の姉、第四皇女フレアが立っていた。ルシフェルとの年の差は六歳。今年で十八歳になるフレアは、フイラ国のエリスとは同じ年であった。ゆるいウェーブがかかった腰までの髪を、頭の脇でまとめている。その髪を払いながら、ルシフェルに近づいてきた。

「よかった……。ケガはないみたいね」

ルシフェルの頬をやさしく撫でながら、フレアは安堵の表情を見せた。

「第六部隊が全滅したと聞いて……心配していたのよ」

「私は平気……」

「こんな時間にここにいるなんて珍しいわね。いつもは黒魔法軍本部にいるのに」

ルシフェルは、普段、夜寝る時以外の時間を本部で過ごしていた。本部に泊まることもある。フレアと会ったのは、実に一ヶ月ぶりぐらいであった。

「少し……気になることがあって……」

ルシフェルは、少し考えて、フレアの腕をグイッとひっぱった。

「フレアお姉様、久しぶりに私の部屋でお話しましょう」

「え？ ちよつと……ルシフェル？ どうしたの？」

有無を言わず、ルシフェルはフレアの腕をグイグイひっぱっていった。

「お姉様。単刀直入に聞きます」

フレアが椅子に座るなり、ルシフェルは顔を近づけて言った。

「な……何かしら」

「私が産まれた時のことをご存知ですか？」

「え……ええ。私は六歳だったから……。そうね、難産だったみたいで、明け方少しバタバタしていたのを覚えているわ」

フレアは、手を顔に添えて斜め上を見ながら言った。何かを思い出すとき、人がよくやる仕草である。上を見たら何があるのか……。ルシフェルは、つられて上を見てしまった。

「その後、私は何か手術のようなものを受けたとか……」

「さあ、そんな話は聞いたことないけど」

首を傾げてフレアが言う。

「そうですか……」

「私が小さかったから覚えてないだけかもしれないけど。一番上のお姉様だったらご存知かもしれないわよ。その当時、今の私と同じ十八歳だったと思うから。でも、どうしたの？ 手術って一体……」

「それより、お姉様、私のお母様の事を教えてください」

「アリシアさんの事？」

「アリシア……というのですか。お母様の名前は」

ルシフェルは、今更だが、自分の母親の名前を知らなかったことに驚愕する。自分が妾の子供というのは知っていたが、母親がどんな人物であったか知ろうともしなかった。知るのが怖かったのも事実である。

「アリシアさんは、とても美しい方だったわ。綺麗な金髪で……。ルシフェルのその瞳はアリシアさん譲りね」ニコリとフレアが笑った。

「お父様の侍女として働いていたけど、戦争が始まると戦場を駆け巡ってケガをした人の傷を治していた。うん、とても素晴らしい、立派な白魔法使いだったわ」

「白魔法使い……ですか」

「でも、あなたを産んですぐに起きた戦争で……亡くなられたわ」
フレアは、長いまつげを伏せて下を向いた。

「あの時のことはよく覚えてる。お父様が、狂ったように泣いていたから……」

「父上が？」

「ええ、あの時程お父様が怖いと思ったことはないわ。叫び続けてそこら中のものを壊して……。余程アリシアさんの事がショックだったのね」

あの冷徹な父親が、最愛の人を亡くした時にはそうなるのか。と、ルシフェルは驚いた。よろよろと歩き、力なくベッドに腰掛ける。

「ルシフェル？」

フレアは、ガクリとうなだれているルシフェルを心配し、近寄ろうと席を立った。瞬間……

「キヤア!!」

短く悲鳴をあげ、フレアはその場に尻もちをついた。そして、窓の外を見たまま動かなくなった。

「お姉様？」

「あ……あ……」

フレアは、視線を窓に固定したまま、声にならない声で喘いでいた。

「窓に何か？ うわっ」

ルシフェルは、そこにいたものに驚いて一歩後ずさる。

「竜の子だ!」

ベランダの手すりに、バレーボール程の大きさの竜がいた。首を動かしながら部屋の様子を伺っている。真っ白なうろこが太陽の光に反射してキラキラと光っていた。

ガラス戸をあけると、竜が翼を広げて部屋に飛び込んできた。しかし、うまく飛べないようで、すぐにボテツと床に落ちてしまった。「ルッルシフェル! そんな……竜なんて……襲われたらどうする

のよー！」

フレアは、腰が抜けたようでもその場から動けなくなっていた。

「安心してください、お姉様。この竜はまだ子供ですし……それに、この竜は絶滅の危機にいる珍しい種類の竜なんですよ！？ ぜひ保護しないと！」

ルシフェルは、少し興奮気味で床で転がっている竜をそつと起こしてやる。

「クワツ」

竜の子は、うれしそうに一鳴きすると、ルシフェルの腕に顔を摺り寄せた。

「……シエ……シエン……？」

ルシフェルは、竜を見つめながら言った。

「x @ \$ & 「」

「ちょ……ちょっとルシフェル？ 何いつてるの？」

急に、ルシフェルがわけのわからない言葉で話し始めた。それと同様の言葉が、竜の口から紡ぎだされている。話が読めなくて一人取り残されてしまったフレアは、たまらず話を中断させた。

「お姉様は竜族語をご存知ないのですか？」

「なっ……習ったことないもの」叫ぶようにフレアは言った。

「そうですね……」

ルシフェルは、残念そうに視線を落とす。心なしか、竜もシヨンボリしたように見えた。

フレアには「x @ 「」に聞こえる言葉を竜が発し、ルシフェルがそれにうれしそうに答えている。

「それじゃあ、私は部屋に戻るわ。あなたが元気そうでよかった。その竜とお友達みたいだし、ゆっくりしていなさい」

フレアは、そう言って逃げるように部屋を出た。

「ああ、シエン……よかった。私はお前ともう一度話をしたかったんだ」

「ボクも、ルシフェル様ともっと一緒にいたかったよ」

シエンは、クワツと鳴くと、ルシフェルの頬をなめた。

「なぜ、シエンがこんな姿に？」

「それがよくわからないんだけど……」そう言ってシエンは自分が竜になった経緯を話し始めた。

シエンの話はこうだった。

あのフィラ国の攻撃で、シエンは即死したらしかった。一番最後の記憶は、まぶしい光が近づいてきたところまでで、次に気がついたら、丘の上にいたという。どこかで自分を呼ぶ声と、体が引つ張られるような感じがして、気がついたら目の前に一人の男が立っていた。

「ルシフェルにもう一度会いたいか？」と問われ「会いたい」と答えると、その男はシエンを連れて別の場所へ移動したのだった。それが竜の巣であった。

孵化する寸前の卵に、シエンの魂を融合させ、こうして竜の子として蘇ったというのだ。

シエンを復活させた男は、おそらくアツシュだろう。

やはり、アツシュは大魔法使いだったに違いない。おそらく、アツシュというのは偽名で、あの姿は偽物なのであろう。あの時、目が合った気がした黒い髪の方が本当の姿だったのかもしれない。しかし、ルシフェルはその男の風貌の記憶がなかった。怒りでそれどころではなかったのだ。

「さっきまで人間だったから、いきなり竜になっても、うまく飛べないんだ」

シエンは、そういいながら不恰好に部屋を飛び回った。あちこちにぶつかっては床に転がったり、何も無いところで急に床に落ちたりしていた。

ルシフェルは、そんなシエンを見ながら大声で笑った。

そう、城下町の子供が、友達と遊びながらそうするように、ルシフェルも笑った。

麗らかな午後、こうしてまた一つ運命の歯車が回り始める。

ルシフェルが感じたように、未来は真っ白であり、たくさんの可能性が待っている。その中の一つを、私達は紡いでいくのだ。

ルシフェルが、未来への可能性を感じていたその頃、フィラ国では……。

「医療チーム総出？」

国王の元に、一つの知らせが入っていた。前線から、苦戦の伝令を知らせに来たようなボロボロの格好をしたランスが、王座の前でかきず傳えている。

「今回のパールミレイとの戦争よりもひどいです。めちゃくちゃです。もう勘弁してください。無理です」

ランスは、そう言いながら瞳に涙を溜めた。我慢できたのは一瞬だけで、すぐに涙の大洪水である。そして、そのまま泣き崩れた。

側にいた父親である大臣は、それを見て大慌てでランスに駆け寄る。国王の前でヘタリ込むという恥さらしな愚行をしでかした嫡子を叱り付ける。

「馬鹿者！ 早く起きんか！」

恰幅のいい大臣は、ふうふう言いながらランスの肩をグイグイとひっぱり、起こそうとした。それでもテコのように動かず、ランスはわんわん泣いている。

「大臣、よいのだ。ランスには、辛い役目をさせてワシも申し訳ないと思っておる」

国王は、片手を大臣にかざし、上下に動かした。

「いえ、愚息ランスロットにエリス様の世話を任せていただいて、光栄の極みでございます！」

「ワシも手に負えなくてなあ。幼い頃から一緒にいるランスに頼んでしまったが……」

国王は、遠くを見ながらそう呟いた。ランスは、少し落ち着いて顔を上げる。

「エリスは今どこにいる？」

「さつきまで……軍部におりましたが……城の……研究室に……行く……と……申しており……ました」

ランスは、言葉切れ切れにそう言った。その間に、涙の池になっている床を袖でさり気無く拭いていた。

「ふむ……被害は甚大だな」国王は、胸まである豊かな髭を触りながら言った。

敗戦が決まり、国王が使者を送ったという話を聞いたエリスは、持っていた本をランスに投げつけた。その衝撃で鼻から赤い筋が口に行く。そして、座っていた椅子のクッションを全部投げつける。そのせいで、ランスの髪はボサボサになる。エリスはその状態のままのランスを引っ張り、怒りのテンションのまま軍部へと殴りこんだ。

バーンと大きな音を立てて、扉が開く。敗戦ではあるが、終戦の知らせを聞き、少し安堵の表情を見せていたファイラ軍人たちの前に、阿修羅が現れた。怒髪天を衝くとはまさにこのことである。般若の形相のエリスが、そこにいた。

「あんた達、何やってるの？」

エリスは、軍部の面々の安堵しきった表情に、さらに怒りを増幅させる。そして、掴んでいたランスの手首を締め上げる。

「いいいいいいッ！」

ランスは、目を丸くして掴まれた手首を見る。城の科学者が開発した握力増幅装置でもつけているのかと思う程、エリスの戦闘力は今、最大になった。

「折れる！ 姫様！ 手っ！ 手首！」

ランスの瞳に、薄っすら涙が浮かび上がってくる。それを見ていた隊員全員が、我先に逃げようとしていた。しかし、エリスはさかさず手前にあつた椅子を放り投げる。近くにいた隊員にあたり、数名が倒れた。

「あんた達、情けないと思わないの？ 負けたのよ？」

ようやくエリスの握力地獄から開放されたランスは、その隙に逃

げようとしたが、エリスはそれに気がつき、ギロリと睨む。そしてランスの足はすくんだ。

「今回、助っ人にアツシユがいたでしょう？ レーザー砲もあったでしょう？ どうして負けるわけ？ あんた達やる気あんの！？」
誰も何も答えない。否、答えることができなかった。何を言ってもエリスの反感を買ってしまう。しかし、答えないのもよくない。どっちに転んでも事態は最悪である。

「あんた達が、しっかりしないからっ、負けちゃったじゃないのっ！」

エリスは、そう言いながら近くにあつたものを次々と放り投げる。椅子、ゴーグル、小型銃、さらには壁に立て掛けてあつた訓練用の槍に手を伸ばす。さすがに、それを見たランスが後ろからエリスを止めようと近寄った。しかし……

「邪魔しないで！」

気配を感じたエリスは、ランスの顔面に思いつき裏拳を叩き込む。それが見事にクリーンヒットし、ランスの世界が暗転した。

それを合図に、隊員達は一齐に逃げ惑う。しかし、エリスは容赦せずに、持っていた槍を投げつける。訓練用に刃がないとはいえ、当たったら怪我をする代物である。慌てふためく隊員達は、そばにあつた机を盾代わりにして応戦する。

エリスと隊員達の攻防は熾烈を極め、次から次へと怪我人が増え、城の医療チームが総動員で治療に当たるハメになったのである。

そうしているうちによりやく目が覚めたランスが目にしたものは、死屍累々と、その中央に立つエリスの姿であつた。

鬼だ……。本物の鬼だ……。ッ！

ランスは、エリスの双眸に灯る怒りに恐怖を覚え、その場で縮こまった。

「次は研究室の連中に喝を入れないとね……」

そうして、エリスは研究室へ向かい、ランスは国王の元へと逃げ込むのであつた。

「軍部の連中でも相手にできぬのなら、研究者がどう抵抗できよう」
国王は、額に手をあてるとガクリと肩を落とした。その瞬間、轟
音と地響きがした。あわてて窓を見ると、城の研究室がある方から
黒煙がたっている。

それを見た国王は、ついに倒れてしまった。

「ひっ姫様ー！」

ランスは、エリスを助けに行く為に、痛む体に鞭打って猛ダツシ
ユしていく。その姿を見て、大臣は人知れず涙を流した。

そして、この物語は幕を閉じる。

エピソード

その後の話を少しだけ話そう。

フィラ国との仲は相変わらず最悪で、常に一発触発であった。しかし、エリスによって大打撃を受けたフィラ国は、思うように兵器開発が進まず、しばらくは戦争がない日常が続く。

その間に、シエンと戦争の話や、城下町の子供の話聞きながら、ルシフェルは自分の出生について調べていた。

城の古参の連中にかたづけしから話を聞いてまわったが、両親の話のみで、自分に関するものは何も無かった。しかし、母親の話を聞けば聞くほど、思いが募り、憧れを抱くようになっていった。そして、自分も母親のような白魔法使いになりたいと強く願うようになっていった。

そうこうしているうちに、グレイが白魔法の魔道書を手に入れ、ルシフェルは白魔法の勉強を始める。しかし、白魔因子の回路が閉じられている為、実際には使えなかった。いつか、白魔法が使えるようになる時の為、勤勉なルシフェルは魔道書を読みこんでいた。目指すは母親である。

そして、ルシフェルの肩には常にシエンが乗っていた。これは、「いつも一緒」という表現よりは、なかなか飛ぶことが上達しないシエンが、ルシフェルに連れられて移動しているといった方が正しかった。

はじめは、みんなフレアのような反応をしていたが、次第にシエンは受け入れられた。

そうして、数奇な運命に導かれ……彼らは再び出会う。

その先に待ち受けている運命を知らず。

再会の言葉は……

それはまた別の話。

エピローグ（後書き）

駄文におつきあいいただきありがとうございました。

前書きに書いた通り、オリジナルストーリーがあつて、そのサイドストーリー的な小説だったので、改めて読んでみると説明不足だったり意味不明な箇所がありますね。そこはご愛敬で。

普段、ミステリしか読まないの、理屈っぽい文章が多いのではないかと懸念を抱いております。

ファンタジー書くならファンタジーを読んだ方が良いでしょうかね。

まだまだ書きためていたものがあるのですが、どれも中途半端に終わっていて……

それもそのうち中途半端なまま投稿して、気が向いたら続きを書こうかな。

どうも話をまとめるのが苦手なので、最後の方でいつも力つきてしまいます。頭の中にはあるけど、文章にするのが……ってやつです。

それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3241j/>

わたしの世界が変わる時

2010年10月8日15時24分発行